

サキヤ派祖師たち三人による金剛乗の決択

サキヤパンディタ作『タントラ部概論建立とタントラの現観の要綱の科文』

和訳 (1)

静 春樹

1 はじめに

本稿は、チベット仏教四大宗派の一つであるサキヤ派五祖の内の三人、ソナム・ツェモ、タクパギェンツェン、サキヤパンディタ（以下、サパン）の「協業」の形となった *rGyu sde spyi'i rnam gzhas dang rGyu kyi mngon par rtogs pa'i stong thun sa bcad*（『「タントラ部概論建立」と「タントラの現観」の要綱の科文』以下、『サパンの科文』）第四章の和訳である。先ず、初期サキヤ派の系譜を簡単に述べる。ツァン（gTsang, 蔵）の豪族クン氏は前伝期の旧訳密教を奉じていたが、クンチョク・ギェルポ（dKon mchog rgyal po, 1034~1102）の代になって、インドから帰国したドクミ訳経師（'Brog mi Shākya ye shes, 992~1072, 1074?）から新訳密教の伝授を受け、サキヤの地に氏寺を建立した（1073）。このクンチョク・ギェルポの実子が、サチェン・クンガニンポ（Sa chen Kun dga' snying po 1092~1158, サキヤ寺座主在位期 1111~1158）¹であり、サキヤ派の宗義は彼の手で確立されたと言われる。彼の没後に宗権は順に二人の息子、兄ソナム・ツェモ（bSod nams rtse mo 1142~1182, サキヤ寺座主在位期 1158~1172）、弟タクパギェンツェン（Grags pa rgyal mtshan 1147~1216, サキヤ寺座主在位期 1172~1216）へと推移する。ソナム・ツェモが座主となってからもサンプ・ネウトク（gSang phu sNe'u thog）寺でチャパ（Phywa pa chos kyi seng ge 1109-1169）の下で論理学の研鑽を継続する間、その留守を守ったのが弟である。タクパギェンツェンは、ムスリムの難を逃れて入蔵したインド人学匠たちを庇護したことでも知られている²。彼の甥がサキヤパンディタ（Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan 1182-1251, サキヤ寺座主在位期 1216-1251, サパンと略）であり、サチェンからは孫となる。さらにサパンの甥が第五祖パクパ（'Gro mgon Phags pa Blo gros rgyal mtshan 1234~1280, サキヤ寺座主在位期 1251~1280）であり、彼は元王朝クビライの帝師となる。サチェンからタクパギェンツェンまでは「在俗密教行者」³であったことから「白衣三祖」、サパンとパクパは出家者であったことから「紅衣二祖」と呼ばれる⁴。

2 『サパンの科文』作成の経緯

ソナム・ツェモの主著の一つである *rGyud sde spyi'i rnam par gzhas pa*（以下、『タントラ部概論建立』）は、[田中: 116] が述べるように、チベット人による最初の体系的なタントラ概論作成となるものであった。同書は「第一章 タントラ部概論建立」「第二章 タントラの定義」「第三章 タントラ解釈の方便の口訣」「第四章 タントラの現観」の四部構成として意図された。最初の三章は序論と方法論であるから、「第四章 タントラの現観」が同著作の枢要となるはずである。ところが、何らかの理由で同書に第四章は存在しないことから、ソナム・ツェモの意図は未完成に終わっている。この残された「第四章 タントラの現観」を取り上げたのがタクパギェンツェン作 *rGyud kyi mngon par rtogs pa rin po che'i ljon shing*（以下、『宝樹』）である。同書は簡単な導入部分の後、直ちに「タントラの現観」を章分けして詳説していく。こうして二人の祖師たちの協業によってチベット人の手になる初めてのタントラ概論が完成した（金剛乗の決択）。これはインド人宗教家から、とくにガヤダラ（Gayadhara）から訳経師ドクミへの伝法⁵によりサキヤ派に伝来した諸々の全てが集大成されてサキヤ派の宗義が確立したことを意味する。「タントラ現観」に関しては、第五祖パクパが *rGyud kyi mngon par rtogs pa ljon chung*⁶ を著していることからサキヤ派の宗義における『宝樹』の重要性が理解されよう。同書作成の経緯をタクパギェンツェン本人が述べた箇所を出す。

その大阿闍梨（ヴィルーパ、Virūpa）の正しい教誡を聖典と共に阿闍梨 Kahna-pa（Kāṅha, Kṛṣṇa）と呼ばれるお方から相承し来たったものをもつパンディタはガヤダラである。吉祥なるヴィルーパの弟子としても知られるが、変化身の智慧ダーキニーから実際に聴聞し最勝の成就が得られた阿闍梨で吉祥なるドーンビヘルカ（Ḍombiheruka）の教誡と顛倒なき聖典の相承をもつ比丘はヴィーラヴァジラ（Vīravajra）と言われる。このように、お二人の智者の教説の甘露が降った尊者ドクミ・シャーキャエーシェーから相承したヘーヴァジラの根本〔タントラ〕と釈タントラ（『金剛網』⁷『サンブタ』⁸）の三つを一つに緬い交ぜて祖師たちがお作りになった現観の文言で不明瞭なものを明白にするために、私のグル（ソナム・ツェモ）がタントラの諸典籍を教説どおりに一方向に緬い交ぜて少しばかり明瞭に為されたのである⁹。さらにそれをも明瞭にす

るために阿闍梨の御前（ソナム・ツェモ）も「書きなさい」と仰せになり、タントラの意味が知りたい弟子（タクパギェンツェン本人）もまた〔その解説を〕懇願したのでこの著作に過誤は存在しないのである¹⁰。

『宝樹』と『サパンの科文』の奥書から同書とサパンの関わりを述べた箇所を引用する。

福分を具えた瑜伽者たちの憩いの場となっている無量なる徳の宝樹と言われるもの、釈迦の優婆塞で最勝なる瑜伽者タクパギェンツェンが優れた吉祥サキヤの地で著したものを終わる。諸々の過失をグルの皆様方にお許し願います。この著作によって一切有情に利益が為されんことを。

かくの如く精髓なる金剛座の北方から百由旬行った比類なき寂靜の地、智者が相続不斷に生じる特相を具える優れた吉祥サキヤにお生まれになり、文殊金剛が現前で加持なさり所知の曼荼羅を余すところなく了知されたが、無量の智慧によって余すところなき逆縁の地に堅固に住することを大我性とするタクパギェンツェンがお作りになったものである。後にまたご本人がこの要約も一つお作りになり、その間に、「書きなさい」とのご本人のお言葉から釈迦の優婆塞で若々しさの顕現する我慢に堅固に住されたクンガ・ギェンツェン（サパン）が校正を為されて、後にご本人の御前に奉呈し極めて清浄と為されたのである¹¹。

正しく歩ませる道である金剛乗の岸边に住し、無数の趣の利益と楽のために甲冑を身に纏い精進を具えたクン氏の尊者の息子であるお方の名を述べるならば、クンガ・ギェンツェンと名づけられたそのお方が十五歳の折に、サキヤの優れた僧院において書いた勝法である¹²。

以上で、本稿が扱う当該科文の位置が明らかになる。『サパンの科文』はソナム・ツェモの著作『タントラ部概論建立』第一・二・三章とタクパギェンツェンの『宝樹』つまり、『タントラ部概論建立』では第四章に当たるはずであった内容を要約した著作である。従って『サパン

の科文』はサキヤ派祖師の三人の手を経て成立した著作と言えるものである。その奥書で、同書を作成した時のサパンは十五歳であったと記されている。チベット人で唯一「パンディタ」の呼び名をもつサパンなればこそ天賦の才が伯父の優れた指導の下で早期に開花したのであろう¹³。私見では、『タントラ部概論建立』『宝樹』の二著作によって「事相」「教相」に亘るサキヤ派の宗義は確立している。このことに加え、若くして二人の伯父の著作から金剛乗の全体図を我がものにしたことが、盛年期のサパンにタントラ自体をテーマにした著作が見られないことと深い部分で関係していると思われるのではない。

次に、ここで取り上げている三本の分量である。『サパンの科文』はその性格上 22 葉の小品である。一方、その第一～三章の元になる『タントラ部概論建立』は 74 葉、第四章の元になる『宝樹』は 139 葉の大部な著作である（『サパンの科文』中で『宝樹』の分は 16 葉）。この『サパンの科文』は『タントラの現観』の忠実な科文ではない。『タントラの現観』は、サパンが名称を挙げるだけにしていく項目についても更なる下位分類を行って場合も多い。『宝樹』自体に忠実な科文を作成すれば、チャートはさらなる深さと広がりを示すことになる。

『タントラ部概論建立』の科文およびその解説が [田中: 116~125] で既に為されていることから、本稿では『サパンの科文』の内第一～三章の訳出は他日を期し、『宝樹』を要約した第四章の試訳のみを以下に出す。

3 『タントラ部概論建立とタントラの現観の要綱科文』和訳

凡例

- ① 『サパンの科文』は『サキヤ派全集』¹⁴ vol. 3 所収 (pp. 228~230) のテキストに基づいている。訳出に際しては、*Sa skya bka' 'bum dpe bsdur ma las sa paṅ Kun dga' rgyal mtshan gyi gsung 'bum* (pp. 324~332) , dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang nas bsgrigs, [Pe-cin]: Kung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2007を参照した。
- ② 『宝樹』(『サキヤ派全集』 vol. 3 所収 (pp.1~70) での論述箇所を示すために (J.50a1) 等で示した。
- ③ 訳語の理解を図るため丸括弧 () 内に説明の語句を入れた。その際に、tib.には立体ローマン、skt.にはイタリックを用いた。
- ④ 箇条書形式をとったので、本体部分での文末の句点は省略した。

和訳

グル・世尊・吉祥なるヘーヴァジラであるヘールカ尊に頂礼いたします。尊師である瑜伽の自在者の吉祥ヴィルーパーに頂礼いたします。仏の一切諸法のお言葉の義について、ヘーヴァジラの根本〔タントラ〕と釈タントラに基づきグルたちが仰ったお言葉の概要を書きます。

それについては四つ、

- 1 タントラ部概論建立 (140b3-145a4) (略)
- 2 タントラの定義 (145a4-b4) (略)
- 3 タントラ解釈法の口訣 (145b4-147a4) (略)
- 4 タントラの現観 (mngon par rtogs pa) (147a4-161b3)

4 [第四の]〈タントラの現観〉(J.3a5)には三つ、

- 1) 因タントラ (rgyu'i rgyud)
- 2) 方便タントラ (thabs kyi rgyud)
- 3) 果タントラ ('bras bu'i rgyud)

4-1 第一の〈因タントラ (人士, gang zag, pudgala)〉(J.3b6)には四つ、

- 1) 因に観待 (rgyu la ltos pa)
- 2) 部族に観待 (阿閼・毘廬遮那・無量寿・宝生・不空成就の五部族)
- 3) 所断に観待 (瞋恚・貪欲・愚癡・我慢・嫉妬の五所断)
- 4) 縁に観待 (五無間罪を犯す者も秘密真言の縁で成就)

4-1-1 第一の〈因に観待〉(J.3b3)には四つ、

- 1) 有情たちは仏の精髓をもつ者と説く
- 2) 何らかの因によってどこかで輪廻する
- 3) 何らかの縁によって限りなく輪廻する
- 4) 心が修治される (sems sbyangs) と仏になると説く

4-2 [第二の]〈方便タントラ〉(J.5a5)には二つ、

- 1) 福分が劣った者¹⁵は順次に趣入
- 2) 福分を具えた者は (147b) 一度に趣入

4-2-1 第一の〈福分が劣った者は順次に趣入〉(J.5a6)には二つ、

- 1) 共乗について順に学ぶ
- 2) 不共乗について順次に学ぶ

4-2-1-1 第一の〈共乗について順次に学ぶ〉(J.5b2)には二つ、

- 1) 行の次第について学ぶ
- 2) 見の次第について学ぶ

4-2-1-1-1 第一の〈行の次第について学ぶ〉(J.5b5)には四つ、

- 1) 帰依処
- 2) 時節ごとの布薩
- 3) 別解脱七終身戒 (so sor thar pa gtan khrims bdun)
- 4) 生起の時が定まっていない発〔菩提〕心

4-2-1-1-1-1 第一の〈帰依処〉(J.6a3)には七つ、

- 1) 因
- 2) 境 (yul, 仏法僧の三宝)
- 3) どのように帰依するか理趣 (tshul, 仕方・方法)
- 4) 帰依の恩恵 (phan yon)
- 5) 学処 (bslab bya)
- 6) 語義
- 7) 区分と殊勝の説示

4-2-1-1-1-1-1 第一の〈因〉(J.6a4)には二つ、

- 1) 自ら〔輪廻の苦を〕畏怖することによる帰依処
- 2) 境を信解することによる帰依処

4-2-1-1-1-1-4 第四の〈恩恵〉(J.7a2)には五つ、

- 1) 一切の律儀が生じる因である
- 2) 大守護となること
- 3) 邪信の業という障礙から救護
- 4) 正しいことを正しいと語る判断
- 5) 教説を喜ぶ諸尊による救護

4-2-1-1-1-1-5 第五の〈学処〉(J.7a4)には二つ、

- 1) 共の学処
- 2) 各別の学処

4-2-1-1-1-1-7 第七の〈区分と殊勝〔の説示〕〉(J.7b3)には二つ、

- 1) 因と果での区分
- 2) 共と不共での区分

この両者ともに区分は四つ、

- 1) 果の帰依処の殊勝
- 2) 因の殊勝 (共の因は信, 不共の因は悲)
- 3) 時の殊勝 (共は一生涯限り, 不共は菩提を得るに至るまで)

4) 理由 (ched du bya ba) の殊勝 (共は自身の畏怖からの解放, 不共は他者の救護)

4-2-1-1-1-2 [第二の]〈布薩〉(J.8a6) には四つ,

- 1) 語義 (善行の種子を回復し, 罪過を浄化)
- 2) 学処
- 3) 儀軌
- 4) 目的 (大乘の人士は有情利益と解脱せしめること, 声聞は自身の解脱の支分となる)

4-2-1-1-1-2-2 [第二の]〈学処〉(J.8b2) には三つ, それを開けば八つ,

- 1) 戒の四支分 (不殺・不盗・不淫・不妄語)
- 2) 不放逸の一支分 (148a) (不飲酒)
- 3) 禁戒の三支分 (不臥高床大床・不花鬘瓔珞・不歌舞戲楽)

4-2-1-1-1-3 [第三の]〈七終身戒〉(J.9a3) には六つ,

- 1) 人士 (三大部洲に生まれた男女)
- 2) 思念 (人士の別により災難救護, 後生の善異熟, 菩提の支分, 無漏の四種)
- 3) 区分
- 4) 不得を得とする理趣 (tshul, 仕方・方法・方途)
- 5) 得を捨離する因
- 6) 得後に守護する理趣

4-2-1-1-1-3-3 [第三の]〈区分〉(J.9b1) には二つ,

- 1) 別解脱の七部
- 2) 学処の場を十に撰集 (身の三業・語の四業・意の三業)

4-2-1-1-1-3-3-1 第一の〈別解脱の七部〉(J.9b1) には四つ,

- 1) 優婆塞・優婆夷の二つ (八齋戒)
- 2) 沙弥・沙弥尼の二つ
- 3) 式叉摩那 (bar slob ma)
- 4) 比丘 (253 戒)・比丘尼 (364 戒) の二つ

4-2-1-1-1-3-3-1-1 第一の〈優婆塞・優婆夷〉(J.9b1) には二つ,

- 1) 優婆塞の学処の数
- 2) 学処の違犯の捨断

4-2-1-1-1-3-3-1-1-1 第一の〈優婆塞の学処の数〉(J.9b2) には六つ,

- 1) 三帰依の受持
- 2) 一戒 (戒の四支分の内の一つを受持) 優婆塞

- 3) 二戒（二つを受持）優婆塞
- 4) 多戒（三つを受持）優婆塞
- 5) 円満（戒の四支分と不飲酒の五戒を受持）優婆塞
- 6) 梵行優婆塞（tshangs par spyod pa'i dge bsnyen）

4-2-1-1-3-6 第六の〈得を守護する理趣〉（J.10b1）には二つ、

- 1) 違犯しないように救護
- 2) 違犯後に修復

4-2-1-1-2 〔第二の〕〈見の次第〉（J.10b6）には四つ、

- 1) 有部（bye brag tu smra ba）
- 2) 経量部（mdo sde pa）
- 3) 瑜伽行派（rnal 'byor spyod pa ba）
- 4) 中観派（dbu ma pa）

4-2-1-1-2-1 第一の〈有部〉（J.11a1）には三つ、

- 1) 〔根基である〕所知の範疇（shes bya'i gnas）
- 2) 有漏（zag pa dang bcas pa）
- 3) 無漏（zag pa med pa）

4-2-1-1-2-1-1 第一の〈所知の範疇〉（J.11a5）には二つ、

- 1) 広大に区分する
- 2) 要約して説く（所知の根本五位）

4-2-1-1-2-1-1-1 第一の〈広大に区分する〉（J.11a5）には二つ、

- 1) 広大に区分する理趣
- 2) それを要約する理趣

4-2-1-1-2-1-1-2 第二の〈要約する理趣〉（J.11b1）には二つ、

- 1) 有漏〔法〕・無漏〔法〕
- 2) 有為〔法〕・無為〔法〕（'dus byas, 'dus ma byas pa）

4-2-1-1-2-1-1-2 〔第二の〕〈要約して説示〉（J.12a2）には五つ、

- 1) 所知である色〔法〕
- 2) 心〔法〕
- 3) 心所〔法〕
- 4) 不相応行〔法〕
- 5) 無為〔法〕

4-2-1-1-2-1-2 〔第二の〕〈有漏（148b）〉（J.13a1）には三つ、

- 1) 情器世間（snod bcud kyi 'jig rten pa）の説示
- 2) 業の説示

3) 煩惱随眠の説示

4-2-1-1-2-1-3 〔第三の〕〈無漏〉(J.13a5)には五つ、

- 1) 諦 (bden pa, satya, 真理) の区分の説示
- 2) 諦の現観が生じる理趣
- 3) 諦の現観が生じる人士の区分
- 4) 諦の現観が生じる人士たちの智 (shes pa) の区分
- 5) 三摩地の殊勝の説示

4-2-1-1-2-1-3-1 第一の〈諦の区分〉(J.13a6)には二つ、

- 1) 諦を四つに区分
- 2) 〔諦を〕二つ (世俗諦・勝義諦) に区分

4-2-1-1-2-1-3-1-1 第一の〈諦を四つに区分〉(J.13a6)には四つ、

- 1) 苦諦
- 2) 集諦
- 3) 滅諦
- 4) 道諦

4-2-1-1-2-1-3-2 〔第二の〕〈諦の現観が生じる階梯〉(J.14b1)には四つ、

- 1) 戒
- 2) 聴聞
- 3) 思念
- 4) 修習

4-2-1-1-2-1-3-2-4 第四の〈修習〉(J.14b4)には二つ、

- 1) 止の成就
- 2) 観の生起

4-2-1-1-2-1-3-2-4-2 第二の〈観の生起〉(J.14b6)には五つ、

- 1) 資糧道 (tshogs lam)
- 2) 加行道 (sbyor lam)
- 3) 見道 (mthong lam)
- 4) 修道 (sgom lam)
- 5) 究竟道 (mthar phyin pa'i lam)

4-2-1-1-2-1-3-2-4-2-2 〔第二の〕〈加行道〉(J.15a1)には四つ、

- 1) 煖 (drod)
- 2) 頂 (rtse mo)
- 3) 忍 (bzod pa)
- 4) 世第一法 (chos mchog)

4-2-1-1-2-1-3-3 第三の〈人士の区分〉(J.15b6)には三つ、

- 1) 声聞種姓をもつ者
- 2) 独覚種姓をもつ者
- 3) 菩薩・仏の種姓をもつ者

4-2-1-1-2-1-3-3-1 第一の〈声聞種姓をもつ者〉(J.16a5)には二つ、

- 1) 凡夫の住位
- 2) 聖者の住位

4-2-1-1-2-1-3-3-1-1 第一の〈凡夫の住位〉(J.16a5)には二つ、

- 1) 随信行 (dad pa'i rjes su 'brang ba)
- 2) 随法行 (chos kyi rjes su 'brang ba)

4-2-1-1-2-1-3-3-1-2 〔第二の〕〈聖者の住位〉(J.16a5)には四つ、

- 1) 預流 (rgyun du zhugs pa)
- 2) 一來 (lan cig phyir 'ong ba)
- 3) 不還 (phyir mi 'ong ba)
- 4) 阿羅漢 (dgra bcom pa)

4-2-1-1-2-1-3-4 第四の〈人士たちの智の区分〉(J.16b5)には三つ、

- 1) 智を三つに区分
- 2) 十に区分 (149a) (法智・世俗智・類智・他心智・無生智など)
- 3) その〔智の〕いずれかを具えた人士

4-2-1-1-2-1-3-4-3 第三の〈そのいずれかを具えた人士〉(J.17a6)には四つ、

- 1) 一つ or 二つを具えた凡夫
- 2) 七つ or 八つを具えた見〔道〕・修〔道〕の者
- 3) 十の全てを具えた阿羅漢
- 4) 共か不共の徳性を具えた仏

4-2-1-1-2-1-3-4-3-4 第四の〈共か不共の徳性を具えた仏〉(J.17b4)には二つ、

- 1) 不共
- 2) 共

4-2-1-1-2-1-3-4-3-4-1 第一の〈不共〉(J.17b4)には三つ、

- 1) 十八不共法 (十力・四無畏・三念住・大悲)
- 2) 〔一切諸仏の〕等不等の〔徳の〕釈説
- 3) 三円徳の釈説

4-2-1-1-2-1-3-4-3-4-1-3 第三の〈三円徳の釈説〉(J.18a1)には三つ、

- 1) 因の円満（福智二資糧の積聚）
 - 2) 果の円満（智慧円満・断円満・威力円満・色身円満）
 - 3) 利得の円満（三悪趣や輪廻の苦から解放 or 善趣・三乗に趣入）
- 4-2-1-1-2-1-3-4-3-4-2** 第二の〈共〉(J.18a4)には二つ、
- 1) 他の徳性が声聞と共通（無煩惱・宿命通・個別正智・無漏の神通）
 - 2) 世間者と共通（神通・禅定・無色・無量・解脱など）
- 4-2-1-1-2-1-3-5** 第五の〈三摩地の殊勝（J.18b3）〉は四つ、
- 1) 語義
 - 2) 実質的区分（四禅定・無色界四处）
 - 3) 三摩地による世間・出世間の成就の理趣
 - 4) 三摩地に依止して三種姓解脱の理趣
- 4-2-1-1-2-2** 第二の〈経量部〉(J.19a6)には二つ、
- 1) 有部を論駁（sun dbyung ba）
 - 2) 自宗の表詮（rang gi grub mtha' brjod pa）
- 4-2-1-1-2-2-1** 第一の〈有部を論駁〉(J.19b1)には二つ、
- 1) 経よりも〔阿毘達磨〕毘婆沙論を量（tshad ma）とする〔として批判〕
 - 2) 所知の五位は実在として成立するとの主張〔を批判〕
- 4-2-1-1-2-2-2** 〔第二の〕〈自宗義〉(J.20a3)には三つ、
- 1) 経の区分（十二部経・三蔵）
 - 2) 経の実義の区分決択
 - 3) 経の語解釈の理趣を説く
- 4-2-1-1-2-2-2-2** 第二の〈経の実義の区分決択〉(J.20b1)には二つ、
- 1) 諸法の範囲（ji snyed, 如量）の決択（蘊界処の建立）
 - 2) 〔諸法の〕様態（ji lta ba bzhin du, 如実）を〔四聖諦・十六空・三眞如・三解脱門などで〕決択
- 4-2-1-1-2-3** 第三の〈瑜伽行唯識派の（149b）決択〉(J.22a2)には三つ、
- 1) 大乘は仏説として成立したこと
 - 2) 声聞の宗義の否定
 - 3) 自宗の表詮
- 4-2-1-1-2-3-3** 第三の〈自宗の表詮〉(J.22b4)には十、
- 1) 阿頼耶識の決択
 - 2) 定義
 - 3) 唯識性の證得への趣入
 - 4) 唯識性へ趣入するための実修の因と果

- 5) 因と果を菩薩の十地として区分する
- 6) 増上戒（三聚浄戒など）
- 7) 〔増上〕心（増上の三摩地）
- 8) 増上慧
- 9) 果である断の円満（煩惱障と所知障の断）
- 10) 〔仏の〕智慧円満

4-2-1-1-2-3-3-1 第一の〈阿頼耶識の決択〉(J.23a3)には四つ、

- 1) 阿頼耶識の存在理由
- 2) 阿頼耶識の定義
- 3) 阿頼耶識が顛倒する時
- 4) 〔外道の〕自在〔者〕などとは異なる殊勝

4-2-1-1-2-3-3-2 〔第二の〕〈定義〉(J.24a2)には三つ、

- 1) 依他 (kun brtags)
- 2) 遍計 (gzhan dbang)
- 3) 円成 (yongs grub)

これらの釈説には、1) 定義 2) 語義 3) 区分があり区分すれば

4-2-1-1-2-3-3-2-1 〔第一の〕〈依他〉(J.25a2)には二つ、

- 1) 不浄〔の依他〕（雑染分）
- 2) 浄の依他（清浄分）

4-2-1-1-2-3-3-2-2 〔第二の〕〈遍計〉(J.25a3)には二つ、

- 1) 本性としての遍計
- 2) 特殊としての遍計

4-2-1-1-2-3-3-2-3 〔第三の〕〈円成〉(J.25a5)には二つ、

- 1) 二つに区分（自性円成の実義、円成を得る不顛倒な方便）
- 2) 四つに区分

4-2-1-1-2-3-3-2-3-2 第二の〈四つに区分〉(J.25a6)には四つ、

- 1) 本性清浄 (rang bzhin gyi rnam byang)
- 2) 無垢清浄 (dri ma med pa'i rnam byang)
- 3) 無垢清浄を得る道の清浄 (lam rnam byang)
- 4) 所縁の清浄 (dmigs pa'i rnam byang)

4-2-1-1-2-3-3-3 第三の〈唯識への趣入〉(J.25b5)には四つ、

- 1) どのような人士が趣入するか
- 2) どのような因で趣入するか
- 3) どのような理趣で趣入するか

4) どの時 or 分位で趣入するか

4-2-1-1-2-3-3-3-2 第二の〈どのような因で趣入するか〉(J.25b6)には三つ、

- 1) 三つの無畏（果の無畏・成就の無畏・威力の無畏）
- 2) 四つの断（声聞縁覚の作意を断、大乘への疑念を断、法執を断、分別を断）
- 3) 止と観を信解することにより趣入

4-2-1-1-2-3-3-3-3 〔第三の〕〈どのような理趣で趣入するか〉(J.26a2)には(150a)三つ、

- 1) 遍計に趣入
- 2) 依他に趣入
- 3) 円成に趣入

4-2-1-1-2-3-3-3-4 〔第四の〕〈どの時 or 分位で趣入するか〉(J.26a5)には四つ、

- 1) 信解行地 (mos pa spyod pa'i sa)
- 2) 見道
- 3) 修道
- 4) 究竟道

4-2-1-1-2-3-3-3-4-1 第一の〈信解行地〉(J.26a6)に二つ、

- 1) 資糧道（大・中・小）
- 2) 加行道

4-2-1-1-2-3-3-3-4-1 第二の〈加行道〉(J.26a6)に四つ、

- 1) 煖（心の顕現が得られた時）
- 2) 頂（顕現が拡散した時）
- 3) 忍（一境に住する三摩地によって）
- 4) 世第一法（心想を滅する三摩地によって）

4-2-1-1-2-3-3-4 第四の〈趣入の因と果〉(J.26b2)には三つ、

- 1) 波羅蜜を六つと数える決定
- 2) 階梯の決定
- 3) 各特相〔の決定〕

4-2-1-1-2-3-3-5 第五の〔十地の〕区分〉(J.26b6)には三つ、

- 1) 十波羅蜜によって地が進趣する理趣
- 2) 諸地が得られる理趣
- 3) どれ程の時を経て進趣するかの理趣

4-2-1-1-2-3-3-5-2 第二の〈諸地が得られる理趣〉(J.27a4) に四つ、

- 1) 信解により獲得
- 2) 〔十法行に住する者は〕行により獲得
- 3) 〔法界を観察する者は〕現観により獲得
- 4) 〔修道を究竟した者は〕実修により獲得

4-2-1-1-2-3-3-10 第十の¹⁶〈智慧円満〉(J.28a2) には三つ、

- 1) 身を三つに区分（自性身・受用円満身・変化身）
- 2) 真実を五支分に区分
- 3) 真実を十八不共法などの仏の無量の徳性に区分

4-2-1-1-2-3-3-10-2 第二の〈真実を五支分に区分〉(J.28a5) には五つ、

- 1) 〔阿頼耶識・五蘊の〕転依
- 2) 根本の白浄法であるもの（六波羅蜜を究竟じて十自在を得ること）
- 3) 不二（有・無などの離辺）
- 4) 常（真如不変・誓願無尽・御事業無辺）
- 5) 不可思議（bsam gyis mi khyab pa）

4-2-1-1-2-4 第四の〈中観〔派〕の宗義決択〉(J.28b6) には二つ、

- 1) 瑜伽行派を論駁
- 2) 自宗の表詮

4-2-1-1-2-4-2 第二の〈自宗の表詮〉(J.30a1) には二つ、

- 1) 世俗諦（世間流伝・有部と同理趣・幻派・経行派・瑜伽行中観派）
- 2) 勝義諦

4-2-1-2 第二の〈不共なる乗について順次に学ぶ〉(J.31b5) には四つ、

- 1) 所作タントラ（外的所作を根本とする）
- 2) 行タントラ
- 3) 瑜伽タントラ（三摩地を根本とする）
- 4) 大瑜伽タントラについて（150b）学ぶ

4-2-1-2-1 第一の〈所作タントラ〉(J.31b6) には二つ、

- 1) 異塾させる（smin par byed pa）
- 2) 解脱させる（grol bar byed pa）

4-2-1-2-1-1 第一の〈異塾させる〉(J.32a1) には四つ、

- 1) 親近（bsnyen pa）
- 2) 〔地〕儀軌
- 3) 加行（sta gon）

4) 正行 (dngos gzhi)

4-2-1-2-1-2 〔第二の〕〈解脱させる〉(J.32a1) には二つ、

- 1) 共の悉地〔成就〕
- 2) 最勝悉地の成就

4-2-1-2-3 〔第三の〕〈瑜伽タントラ〉(J.32b1) には二つ、

- 1) 弟子の人士
- 2) 阿闍梨の人士

4-2-2 第二の〈福分を具える者は一度に趣入〉(J.33a3) には二つ、

- 1) 異塾させる灌頂の道
- 2) 解脱させる輪を伴う二次第

4-2-2-1 第一の〈異塾させる灌頂の道〉(J.33a5) には二つ、

- 1) 不共の帰依発心
- 2) 灌頂

4-2-2-1-1 第一の〈不共の帰依発心〉(J.33b3) には二つ、

- 1) 〔発菩提心の〕儀軌をどのように為すか
- 2) 儀軌と随応する学処の意味を釈説

4-2-2-1-1-2 第二の〈随応する学処の意味を釈説〉(J.33b3) には二つ、

- 1) 帰依の学処
- 2) 発〔菩提〕心の学処

4-2-2-1-1-2-2 第二の〈発〔菩提〕心の学処〉(J.34a2) には二つ、

- 1) 異塾
- 2) 趣入発心の学処

4-2-2-1-2 〔第二の〕〈灌頂〉(J.34a6) には二つ、

- 1) 弟子撰受の儀軌
- 2) 異塾させる灌頂の現観

4-2-2-1-2-2 第二の〈異塾させる灌頂の現観〉(J.34b2) には七つ、

- 1) 親近
- 2) 地儀軌
- 3) 準備
- 4) 〔曼荼羅を〕描いて装飾品を配置
- 5) 〔曼荼羅を〕成就して供養
- 6) 〔曼荼羅に〕趣入して灌頂
- 7) 随行の儀軌

4-2-2-1-2-2-1 第一の〈親近〉(J.34b3)には三つ、

- 1) 上は標幟 (*cihna*) の親近
- 2) 中は時 (期間) の親近
- 3) 下は〔念誦する真言の〕数の親近

4-2-2-1-2-2-2 〔第二の〕〈地儀軌〉(J.34b6)には五つ、

- 1) 〔地の〕観察 (*sa brtag pa*) 〔と選択〕
- 2) 祈求 (*bslang ba*, 地主神に土地借用の許可を懇願)
- 3) 浄化 (*sbyang*)
- 4) 受持 (*gzung ba*)
- 5) 守護 (*bsrung ba*)

4-2-2-1-2-2-2-2 第二の〈祈求〉(J.35a1)には二つ、

- 1) 顕現〔する土地神〕(*mngon pa*) から祈求
- 2) 顕現しない〔土地神〕(*mi mngon pa*) から祈求

4-2-2-1-2-2-2-3 第三の〈浄化〉(J.35a2)には二つ、

- 1) 行為 (151a) と所作による過誤を浄化
- 2) 三摩地によって障礙を浄化

4-2-2-1-2-2-2-4 〔第四の〕〈受持〉(J.35a4)には二つ、

- 1) 慧 (*blo*)
- 2) 〔正しい〕姿勢で受持 (金剛歩行など)

4-2-2-1-2-2-3 〔第三の〕〈準備〉(J.35a6)には四つ、

- 1) 土地の女神 (*sa'i lha mo*)
- 2) 〔土地の〕男神 (*lha*)
- 3) 瓶 (*bum pa*)
- 4) 弟子が準備に入る

4-2-2-1-2-2-4 〔第四の〕〈〔曼荼羅を〕描いて装飾品を配置〉(J.35b2)には四つ、

- 1) 糸で描く (*thig gis bri ba*)
- 2) 顔料で描く (*tshon gis bri ba*)
- 3) 標幟を布置
- 4) 装飾品を配置

4-2-2-1-2-2-5 〔第五の〕〈成就して供養〉(J.35b5)には二つ、

- 1) 〔曼荼羅〕成就 (五部族出生の明妃を安立)
- 2) 供養

4-2-2-1-2-2-6 〔第六の〕〈趣入して灌頂〉(J.36a1)には二つ、

- 1) 阿闍梨が趣入して威力〔を身に付ける〕
 - 2) 弟子が趣入して授ける
- 4-2-2-1-2-2-6-2** 第二の〈弟子が趣入して授ける〉(J.36a4)には二つ、
- 1) 趣入(曼荼羅の外縁に入る、内円に入る)
 - 2) 灌頂
- 4-2-2-1-2-2-6-2-2** 第二の〈灌頂〉(J.36a5)には二つ、
- 1) 共〔の六灌頂〕(水・宝冠・金剛杵・鈴・名・共の禁戒)
 - 2) 不共の灌頂(瓶・秘密・般若智慧・第四)
- 4-2-2-1-2-2-6-2-2-2** 第二の〈不共の灌頂〉(J.36a6)には二つ、
- 1) 定まった儀軌(nges thig, 瓶・秘密・般若智慧・第四)
 - 2) 結行灌頂(mtha' rten)
- 4-2-2-1-2-2-6-2-2-2-2** 第二の〈結行灌頂〉(J.37a3)には四つ、
- 1) 許可(尊格供養・有情利益・法講釈の)
 - 2) 授記(秘密灌頂の結行)
 - 3) 蘇息(般若智慧灌頂の結行)
 - 4) 讚嘆(第四灌頂の結行)
- 4-2-2-1-2-2-7** 〔第七の〕〈隨行の儀軌〉(J.37a6)には五つ、
- 1) 尊師に献財
 - 2) 曼荼羅に供養
 - 3) 堪忍と還着の奏上
 - 4) 後始末(las kyi rjes bsdu ba)
 - 5) 祝宴(聚輪など)
- 4-2-2-2** 第二の〈解脱させる〔輪を伴う二次第〕〉(J.38a5)には二つ、
- 1) 〔方便タントラは二次第に要略される、その二次第の〕道自体
 - 2) 道が生じる階梯である人士の部類
- 4-2-2-2-1** 第一の〈道自体〉(J.38a6)には三つ、〔開けば十一現観となる〕
- 1) 根本の大印最勝悉地成就の現観(五現観)
 - 2) 世間と出世間の一切悉地成就の現観(五現観)
 - 3) 両者に必要な(dgos pa'i grogs)律儀と三昧耶(全体で一現観)
- 4-2-2-2-1-1** 第一の〈大印最勝悉地成就の現観〉(J.38b1)には五つ、
- 1) 證得する見
 - 2) 〔究竟次第の所依である〕生起次第〔の修習〕
 - 3) 生起次第の尊格を智慧として(151b)證得するための究竟次第〔の修

習]

- 4) 二次第に住する者が熱を得てから自心の情器世間を観察する行
- 5) 行に住する者が最勝悉地が本性の因である Āli・Kāli を自性とする菩提心の修習

4-2-2-1-1-1 第一の〈證得する見〉には二つ (J.39a5) ,

- 1) 最初に見を説示する目的 (見の證得があれば一切の道が解脱道となる故)
- 2) 見を説示する理趣

4-2-2-1-1-1-2 第二の〈見を説示する理趣〉 (J.39b1) には五つ,

- 1) 灌頂の智慧の説示によって真如の義についての開示 (ngo sprad)
- 2) その智慧が人我として顛倒して妄分別となるが故に人無我の説示
- 3) 境の智慧に対する増益を断じるため境の所知の一般的本義 (gnas lugs) を決択
- 4) そのような真如を一切の善説の證得すべき対象として説く
- 5) その見を殊勝に優れた秘密真言の甚深なる方便によって證得する説示

4-2-2-1-1-1-2-1 第一の〈灌頂の智慧の説示によって真如の義についての開示〉 (J.39b4) には三つ,

- 1) その智慧が輪廻と涅槃には殊勝や区分はないと説く
- 2) 無差別なる智慧自体をどのように證得するかの説示
- 3) その智慧を一切法の自性・能遍 (khyab byed) ・因と説く

4-2-2-1-1-1-2-2 第二の〈人我の否定〉 (J.40b4) には二つ,

- 1) 人我自体
- 2) 人我の否定

4-2-2-1-1-1-2-2-1 第一の〈人我自体〉 (J.40b6) には五つ,

- 1) サーンキヤ学派 (grangs can pa)
- 2) ヴェーダ学派 (rig byed pa)
- 3) ヴァイシェーシカ学派 (bye brag pa)
- 4) ジャイナ教徒 (gcer bu pa)
- 5) ローカーヤタ派 (chad par lta ba)

4-2-2-1-1-1-2-3 第三の〈境の所知の一般的本義を決択〉 (J.41a6) には二つ,

- 1) 二諦建立の概説
- 2) 二諦の本性決択による (152a) 離辺の見を廣大に釈説

4-2-2-2-1-1-1-2-3-1 第一の〈二諦建立の概説〉(J.41b6)には三つ、

- 1) 定義(世俗と世俗諦, 勝義と勝義諦の語義)
- 2) 性相(慧が障礙を伴う境であれば世俗諦, 不顛倒の境ならば勝義諦)
- 3) 性相決定の量

4-2-2-2-1-1-1-2-3-1-2 第二の〈性相〉(J.42a5)には二つ、

- 1) 境の慧(yul can blo)の建立
- 2) 境の慧に觀待して諦を二つに建立する理趣

4-2-2-2-1-1-1-2-3-1-2-1 第一の〈境の慧の建立〉(J.42a6)には四つ、

- 1) 声聞の論旨('dod tshul)
- 2) 瑜伽行派の論旨
- 3) 相續斷無住派(rgyun chad rab tu mi gnas pa)の論旨
- 4) 双運無住派(zung 'jug rab tu mi gnas pa)の論旨

4-2-2-2-1-1-1-2-3-1-2-2 [第二の]〈諦を二つに建立する理趣〉(J.43a4)

には三つ、

- 1) 二つの慧に觀待して境を二諦に区分
- 2) 二諦(勝義諦と世俗諦)の同異を思量
- 3) 数の決定(慧について愚蒙であるか, ないかで諦を二つに決定)

4-2-2-2-1-1-1-2-3-1-2-2-1 第一の〈二つの慧に觀待して境を二諦に区分〉(J.43a5)には三つ、

- 1) 根本の区分
- 2) 区分の意味
- 3) それについての論難を反駁

4-2-2-2-1-1-1-2-3-1-2-2-2 第二の〈[二諦の]同異を思量〉(J.45b1)には四つ、

- 1) [二諦は]指示対象は別異ではない(dngos po tha dad ma yin pa)
- 2) 別異は絶対無ではない(tha dad gtan med ma yin)
- 3) 同一が否定された別異(gcig pa bkag pa'i tha dad, 一方が有ならば他方は無)
- 4) 異類の排除[概念](意味内容)から区分された別異(ldog pa las dbye ba'i tha dad)

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2 第二の〈本性決択による離辺の見を廣大に釈説〉(J.46a4)には三つ、

- 1) 一切[法]有と説き世俗諦として決択するが故に, 實在論者と理趣が同じで殊勝に優れていると説く

- 2) 一切〔法〕無と説き般若の慧を境と説くが故に、通大乘と理趣が同じで殊勝に優れていると説く
- 3) その故に無二の慧によって離辺と決択して双運で実修する（nyams su blang ba）理趣を説く

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-1 第一の〈一切〔法〕有と説き世俗諦と決択するが故に、実在論者と理趣が同じで殊勝に優れていると説く〉（J.46b1）には二つ、

- 1) 一切法は蘊界処と（152b）説くから声聞部派と同じであり、外教徒より殊勝に優れている
- 2) 境は顕現するが自性は無く、顕現するものは心と説くから唯識と同じであり、声聞よりは殊勝に優れていると説く

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-1-2 第二の〈境は顕現するが自性は無く、顕現するものは心と説く〉（J.47a2）には二つ、

- 1) 一切は心として成立
- 2) その顕現するものは自性なしと決択

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-1-2-2 第二の〈顕現するものは自性なしと決択〉（J.47b3）には四つ、

- 1) 一切法を心に摂し心の属性と説く
- 2) 心の特相の説示
- 3) 心の威力の説示
- 4) 心の本性の説示

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-2 第二の〈般若である勝義の思念によって量るならば一切は無に他ならないと説く〉（J.48a6）には二つ、

- 1) 境は不成立であり、境の知も不成立の故に唯識よりも殊勝に優れている〔と説く〕
- 2) 世俗は幻の如くであるが、勝義として本義はこれであると主張しないが故に中観無自性派（dbu ma ngo bo nyid med pa）よりも殊勝に優れていると説く

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-2-2 第二の〈世俗は幻の如くであるが、勝義として本義はこれであると主張しないが故に中観無自性派よりも殊勝に優れていると説く〉（J.49a6）には二つ、

- 1) 〔世俗は〕幻として成立（一切法を夢・幻などの十二喩によって決択）

2) 本義 (*vastu* は無自性であるといった) を主張しない (中観無自性派を批判)

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-3 第三の〈双運で実修する〔理趣を説く〕〉(J.49b3)

には三つ、

- 1) 空〔・不空〕などの四〔句分別〕は辺であるが故に断じると説く
- 2) 離辺の中観と言われるものに執することも辺である〔と説く〕
- 3) すなわち離辺〔の見〕も双運の理趣によって実修すると説く

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-3-1 第一の〈空などの四つは辺であるから断じる〉

(J.49b5) には二つ、

- 1) 本義〔の成立〕はない〔と説く〕
- 2) それについての論難を反駁

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-3-1-1 第一の〈本義〔の成立〕はない〔と説く〕〉(J.50a2)

には四つ、

- 1) 本義を決定しようとするれば撞着となる
- 2) 〔本義の〕決定した慧は境においては不適切
- 3) 慧に観待しない境は不適切
- 4) 辺に執すれば(153a) 生存 (*bhāva*) の根となる

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-3-1-2 〔第二の〕〈論難を反駁〉(J.51a3) には三つ、

- 1) 自己撞着〔になるとの論難〕を断じる
- 2) 〔本義を主張しないと〕凡俗〔と同じ〕になる〔との論難〕を断じる
- 3) 教証と相違〔すると論難〕を断じる

4-2-2-2-1-1-1-2-3-2-3-3 第三の〈離辺〔の見〕も双運の理趣によって実修する〉(J.52a5) には三つ、

- 1) 双運 (般若と方便, 空と悲) の自性
- 2) 勝義として〔一切法は〕思念において存在しない (思念を超越) と説く
- 3) 世俗として〔のみ見を〕修習する理趣を説く

4-2-2-2-1-1-1-2-5 第五の〈そのような見を證得させるのは殊勝な秘密真言に他ならず, それ以外では證得できないと説く〉

(J.55a6) には四つ、

- 1) その真如は他の方便では證得できず, 甚深なる方便によって證得すると説く
- 2) 秘密真言の流儀による見から殊勝に智慧を説く

- 3) その智慧（第三灌頂から生じた智慧）を喩の智慧として説く
- 4) その智慧も身に甚深に浸透することで證得されるから金剛身の本義を決択

4-2-2-2-1-1-1-2-5-2 第二の〈秘密真言の流儀による見から殊勝に智慧を説く〉(J.55b6)には二つ、

- 1) [大智慧は *vastu* の] 本性としての俱生と結合
- 2) [大智慧は第三灌頂で證得される] 融化した樂である俱生と結合 [の二つがあり]

この両者ともに区分は五つで、

- 1) 本性（大智慧であり、有情の身に本性の俱生智として遍満）
- 2) 定義（一切の分別を遠離している）
- 3) 智慧の所依（身は仏の精髓をもつが故に大智慧は身に住する）
- 4) その智慧を一切の自性として説く（一切の *vastu* に遍満）
- 5) 所依・能依の本義を説く（大智慧は身に住するが身からは不生）

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4 第四の〈金剛身の本義を説く〉(J.57a3)には三つ、

- 1) どのように [身が] 滅するかの理趣
- 2) どのように身が成立するかの理趣
- 3) 生身に脈管と輪などがどのように存在するかの決択

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-2 第二の〈どのように身が成立するかの理趣〉(J.57b2)には五つ¹⁷、

- 1) 身語意三つの所依・能依の理趣
- 2) 心から身語意の三つがどのように生じるかの理趣
- 3) 八喩（灯火・鏡・印など）と三空（大空・極空・空）の縁（153b）からどのように生じるかの理趣
- 4) 四生（卵・胎・湿・化）の次第
- 5) 特に胎生を廣大に釈説

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-2-5 第五¹⁸の〈胎生を廣大に釈説〉(J.59a2)には二つ、

- 1) 最初に身が何から生じるかの因
- 2) その因によって身がどのように成立するかの理趣

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-2-5-1 第一の〈身が何から生じるかの因〉(J.59a4)には二つ、

- 1) 有（*vastu* である精液・血）と無（*rūpa* でない心）から生じるとの説
- 2) 三心から生じるとの説

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-2-5-2 〔第二の〕〈その因によって身が成立する理趣〉
(J.59b3) には二つ、

- 1) 微細 (phra ba) 成立の理趣
- 2) 粗大 (rags pa) 成立の理趣

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3 第三の〈生身に存在する理趣の決択〉(J.60a5) には二つ、

- 1) 三曼荼羅の決択
- 2) 三曼荼羅を現行させる氣息風 (rlung, 生命風・下行風など) の決択

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-1 第一の〈三曼荼羅の決択〉(J.60b6) には三つ、

- 1) 脈管の身曼荼羅
- 2) 文字である Bhaga 曼荼羅 (根本の A 字と Eṃam 字, 8 文字, 16 文字, 37 文字など)
- 3) 〔虚空〕界 (蓮華) と甘露の曼荼羅 (根本の精液と血, 五甘露, 十六界, 37 文字)

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-1-1 第一の〈脈管である身曼荼羅〉(J.60b6) には五つ、

- 1) 根本の三脈管 (ro ma rasanā, rkyang ma lalanā, kun dhar ma avadhūti)
- 2) 菩提心降下の根本三十二脈管
- 3) 文字布置の根本百二十〔脈管〕
- 4) 支分の根本三万二千脈管
- 5) 不可思議の (毛孔に位置する微細な 80 億の) 脈管

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-2 第二の〈生氣風の決択〉(J.62a6) には五つ、

- 1) 〔生氣風の〕本性 (識の所依となっているもの)
- 2) 〔生氣風の〕区分
- 3) 〔生氣風の〕作業
- 4) 生氣風が働く理趣の建立
- 5) 道で働けばどうなるか

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-2-2 〔第二の〕〈〔生氣風の〕区分〉(J.62b2) には三つ、

- 1) 生氣風の本姓から六つに区分 (地・水・火・風・虚空・識風)
- 2) 動く理趣から区分
- 3) 作業から区分 (根本の五風・支分の五風)

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-2-2-2 第二の〈動く理趣から区分〉(J.62b4) には二つ、

- 1) 智慧の生氣風（*Avadhūti* 脈管にあって不動を本性とする）
- 2) 羯磨の生氣風

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-2-3 〔第三の〕〈〔生氣風の〕作業〉（J.63b1）には二つ、

- 1) 一般的作業（識の所依、常の呼吸、生有と死有に働く）
- 2) 各別の作業（生体の活動を統御）

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-2-4 第四の〈〔生氣風の〕動く理趣を建立〉（J.64a5）には五つ、

- 1) 何が動くと言われるのか（持命風・下行風など十風）
- 2) それがどのように（154a）動くかの理趣
- 3) どの場所と道から動くか
- 4) どれだけの数が〔鼻門から〕動くか（昼夜一日に 21600 回）
- 5) その数どおりに往く理由を説く（生氣風が体内の時を保持）

4-2-2-2-1-1-1-2-5-4-3-2-4-5 第五の〈その数どおりに往く理由を説く〉（J.66a5）には二つ、

- 1) ヲァジラダーカと ヲァジラマーラーを意趣
- 2) ヘー ヲァジラの密意

4-2-2-2-1-1-2 〔第二の〕〈生起・究竟次第〉（J.67b2）には二つ、

- 1) 二次第の一般的現観
- 2) 各別の現観

4-2-2-2-1-1-2-1 第一の〈二次第の一般的現観〉（J.67b6）には六つ、

- 1) 根本の区分（二次第の本性）
- 2) 区分の意味
- 3) 語義 or 決定語の説示
- 4) 二次第の数を決定して修習する必要性
- 5) 二次第によって解脱する理由
- 6) 二次第修習の階梯の説示

4-2-2-2-1-1-2-1-1 第一の〈根本の区分〉（J.68a1）には三つ、

- 1) 根本の所浄から名づける（所浄 *sbyang gzhi*, 能浄 *sbyang byed*）
- 2) 根本の果から名づける（生起次第は歓喜が生起、それ以上の獲得はないから究竟次第）
- 3) 根本の道から名づける

4-2-2-2-1-1-2-1-4 第四¹⁹の〈数を決定して修習する必要性〉（J.68b2）に

は三つ、

- 1) 所断が二つであるから二次第とも修習する必要性
 - 2) 獲得対象が二つであるから二次第とも修習する必要性
 - 3) 自らの本性が所依・能依であるから〔二次第とも〕修習する必要性
- 4-2-2-2-1-1-2-1-4-1** 第一の〈所断が二つであるから二次第とも修習する〉(J.68b4)には二つ、
- 1) 通常の妄分別〔を断じるために生起次第〕
 - 2) 妙勝なる尊への染着〔を断じるために究竟次第〕
- 4-2-2-2-1-1-2-1-4-1-1** 第一の〈通常の妄分別〉(J.68b4)には二つ、
- 1) 因業と煩惱
 - 2) 果である我と我執
- 4-2-2-2-1-1-2-1-4-1-1-2** 第二の〈果である我と我執〉(J.69a1)には二つ、
- 1) 器世間〔浄化の理趣〕
 - 2) 有情世間浄化の理趣
- 4-2-2-2-1-1-2-1-4-1-1-2-2** 第二の〈有情世間浄化の理趣〉(J.69a2)には二つ、
- 1) 生断による四生浄化の理趣(持金剛や女尊が生起することで四生を浄化)
 - 2) 尊格の相による三煩惱浄化の理趣(忿怒尊の身に住することで瞋を修治など)
- 4-2-2-2-1-1-2-1-4-2** 第二の〈獲得対象が二つであるから二次第とも修習する必要性〉(J.70b6)には二つ、
- 1) 生起〔次第〕によって色身〔を獲得〕
 - 2) 究竟〔次第〕によって法(154b)身〔を獲得〕
- 4-2-2-2-1-1-2-1-5** 第五²⁰の〈〔二次第によって〕解脱する理由〉(J.72b2)には三つ、
- 1) 部族 or 因であるから解脱する必然性
 - 2) 殊勝なる方便を具えて円満しているから解脱する必然性(毒の性質を知るなど)
 - 3) 三清浄を自性とするから解脱する必然性
- 4-2-2-2-1-1-2-1-5-3** 第三の〈三清浄を自性とするから解脱する必然性〉(J.74a4)には三つ、
- 1) 因タントラの三清浄
 - 2) 方便タントラの清浄

3) 果タントラの清浄

これら三者ともに、1) [本不生なる] 真如 [清浄] 2) 各尊格 [清浄] 3) 自証知清浄 [を具足]

4-2-2-2-1-1-2-2 第二の〈各別の現観〉(J.75b2) には二つ、

- 1) [究竟次第の] 所依である生起次第
- 2) 尊格を智慧として證得するための究竟次第

4-2-2-2-1-1-2-2-1 第一の〈所依である生起次第〉(J.75b2) には五つ、

- 1) 生起次第を修習する人士（已灌頂者で三昧耶を具する者）
- 2) 場所
- 3) 時
- 4) 思念（有情のために仏 [位] を願う）
- 5) 本尊瑜伽

4-2-2-2-1-1-2-2-1-2 [第二の]〈場所〉(J.75b3) には三つ、

- 1) 初業者の場所
- 2) 少しばかり堅固な者の場所
- 3) 大堅固が得られた者の場所

4-2-2-2-1-1-2-2-1-3 [第三の]〈時〉も同様の三つである

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5 [第五の]〈本尊瑜伽〉(J.76a5) には二つ、

- 1) 尊格の部類
- 2) 現観

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5-1 第一の〈尊格の部類〉(J.76b1) には二つ、

- 1) 本尊として最勝成就の曼荼羅 [の数]
- 2) 广大羯磨 [成就] の [別尊] 瑜伽 (*Kurukullā, Tārā, Prajñāpāramitā* 等)

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5-2 第二の〈現観〉(J.77b4) には三つ、

- 1) 加行の儀軌
- 2) 正行の瑜伽
- 3) 円満させる道の支分

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5-2-1 第一の〈加行の儀軌〉(J.77b4) には三つ、

- 1) 广大
- 2) 中
- 3) 要略

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5-2-1-1 第一の〈广大〉(J.77b5) には三つ、

- 1) 福德資糧 [積聚]
- 2) 智慧資糧 [積聚]

3) 危難を鎮めるために守護輪の観想

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5-2-1-1-1 第一の〈福德資糧〔積聚〕〉(J.77b5)は広大を略して四つ、

- 1) 四無量心によって撰集
- 2) 四無量心と前供養の二つによって撰集 (155a)
- 3) 七支〔供養〕と三支によって要略
- 4) 五部の律儀 (rigs lnga'i sdon pa) の受持によって撰集

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5-2-2 〔第二の〕〈正行の瑜伽〉(J.78a5)には三つ、

- 1) 支分円満の広大〔の流儀〕
- 2) 〔支分円満の〕中
- 3) 〔支分円満の〕要略

4-2-2-2-1-1-2-2-1-5-2-2-1 第一の〈支分円満の広大〉(J.78a6)には三つ、

- 1) 三摩地を三つに撰集 (初瑜伽・曼荼羅最勝王・羯磨最勝王)
- 2) 支分を六つに撰集
- 3) 親近承事を四つに撰集 (四金剛)

4-2-2-2-1-1-3 第三²¹の〈〔生起次第の〕尊格を智慧として證得するための究竟次第〉(J.81a2)には三つ、

- 1) 究竟次第の定義 (他流儀の否定・自流儀の建立)
- 2) 二つの究竟〔次第〕の趣旨
- 3) 〔究竟次第〕実修の方便

4-2-2-2-1-1-3-2 第二の〈二つの究竟〔次第〕の趣旨〉(J.81b1)には三つ、

- 1) 道についての疑念を断じるために外部の一切の戲論を〔身の〕内で徐断
- 2) 真実決択 (遷移と女尊などの決択) により菩提心の本性を説く
- 3) 菩提心を断じることなく生起させると説く

4-2-2-2-1-1-3-2-1 第一の〈道についての疑念を断じるために外部の一切の戲論を〔身の〕内で除断〉(J.81b2)には二つ、

- 1) 防護 (sdom pa) の区分により身と脈管の決択
- 2) 脈管と菩提心の説示により地と道の一切を内で決択

4-2-2-2-1-1-3-2-1-1 第一の〈防護の区分により身と脈管の決択〉(J.81b3)には五つ、

- 1) どこで防護されるか (臍の Am 字, 四輪から不可思議に至る脈管)

- 2) どれほど防護するか
- 3) 何を防護するか（声聞は身語の過患、菩薩は十不善）
- 4) 何によって防護するか（印契の瑜伽 or *Caṇḍālī* の瑜伽）
- 5) 防護の本性（自生の智慧 or 俱生）

4-2-2-2-1-1-3-2-3 第三の〈断じることなく〔菩提心を〕生起すると説く〉
(J.82b4) には二つ、

- 1) 断じないこと (*mi sbang*)
- 2) 生起すること（世俗・勝義の二種菩提心を生起）

4-2-2-2-1-1-3-3 第三の〈〔究竟次第〕実修の方便〉(J.83a2) には五つ、

- 1) 二方便実修の理趣
- 2) 実修から生じる三摩地の定義
- 3) 生じてないものが生起して生起の利得をもたらす方便
- 4) 障礙である危難の除去
- 5) 三摩地の熱の標識

4-2-2-2-1-1-3-3-1 第一の〈二方便実修の理趣〉(J.83a3) には二つ、

- 1) 自身加持
- 2) 曼荼羅輪の方便

両者ともに、1) 所縁を伴う所依の世俗菩提心（融化した楽である俱生）
(155b) 2) 無所縁の〔能依の〕勝義菩提心（本性としての俱生）の二つ
がある

4-2-2-2-1-1-3-3-1-1 第一の〈所縁を伴う自身加持〉(J.83a6) には二つ、

- 1) 甚深の究竟次第（*Caṇḍālī* の瑜伽、心滴の瑜伽）
- 2) 非甚深の究竟次第（微細瑜伽の観想）

4-2-2-2-1-1-3-3-1-1-1 第一の〈甚深の究竟次第〉(J.83b1) には二つ、

- 1) 各別に修習
- 2) 伴って修習

4-2-2-2-1-1-3-3-1-1-1-1 第一の〈各別の修習〉(J.83b1) には四つ、

- 1) 脈管の身体の瑜伽
- 2) 文字の *Bhaga* の瑜伽
- 3) 甘露の滴の瑜伽
- 4) 心臓の智慧の氣息風の瑜伽

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2 第二の〈所縁を伴う曼荼羅輪〔の方便〕〉(J.84a2)
には三つ、

- 1) 依止して生じる何らかの所依

2) それが依止する方便

3) 能依から出生する智慧の定義

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-1 第一の〈依止して生じる何らかの所依〉(J.84a3)

には二つ,

1) 生身の印契 (dngos kyi phyag rgya, 瑜伽女)

2) 智慧の印契

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-1-1 第一の〈生身の印契〉(J.83a3) には二つ,

1) 分位を密意して三つに区分

2) 真実の本性を密意して四つに区分

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-1-1-1 第一の〈分位を密意して三つに区分〉(J.83a4)

には三つ,

1) 若さ〔に随応〕(十二歳・十六歳の印契女)

2) 部族〔に随応〕(*Narṭī, Rajakī, Caṇḍālī, Brāhmaṇī* 等)

3) 徳性に随応

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-1-1-1-3 第三の〈徳性に随応〉(J.83a6) には二つ,

1) 浄治の徳性を具足

2) 生得の徳性〔を具足〕

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-1-1-2 第二の〈真実の本性に密意して四区分〉(J.84b2)

には四つ,

1) 如語 (母などの八人・*Brāhmaṇī* などの八人を文字通りにとる)

2) 非如語 (世間の親族関係ではないとする)

3) 灌頂に随応

4) 徳性と相応

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-2 第二の〈依止する方便〉(J.85a2) には三つ,

1) 三想を具える加行

2) 遍入する智慧を識別する正行

3) 顛倒に満たされて智慧が損なわれないように守護する随行

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3 第三の〈依止から出生する智慧〉(J.85a5) には二

つ,

1) 他の顛倒した分別の否定

2) 自宗の表詮 (156a)

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1 第一の〈他の顛倒した分別の否定〉(J.85a6) に

は二つ,

1) 顛倒した分別

2) 顛倒した分別の否定

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1-1 第一の〈顛倒した分別〉(J.85a6)には三つ、

- 1) 場所
- 2) 本性〔についての悲観論〕
- 3) 〔四歓喜の〕階梯についての顛倒した分別

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1-2 〔第二の〕〈顛倒した分別の否定〉(J.85b3)にも1) 場所 2) 本性 3) 階梯についての顛倒した分別の三つがある

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1-1-1 第一の〈場所〉(J.85b3)には二つ、

- 1) 〔菩提心が〕金剛宝（龟头）にある〔とする顛倒した分別の否定〕
- 2) 〔菩提心が〕蓮華（女陰）にある〔時〕とする顛倒した分別〔の否定〕

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1-1-3 第三の〈階梯についての顛倒した分別〉(J.86b3)には二つ、

- 1) 第三と主張する二流儀の否定
- 2) 第四と主張する一流儀の否定

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1-1-3-1 第一の〈第三と主張する二流儀の否定〉(J.86b3)には二つ、

- 1) 悪い灌頂の流儀を否定（本性として顛倒がある）
- 2) 正しくない灌頂の流儀を否定（階梯の顛倒がある）

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1-1-3-1-2 第二の〈正しくない灌頂の流儀を否定〉(J.86b4)には二つ、

- 1) 教証による否定
- 2) 理証による否定

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-1-1-3-1-2-2 第二の〈理証による否定〉(J.87a1)には十一、

- 1) 四刹那の〔順の〕錯誤
- 2) 〔四〕歓喜〔の順の〕錯誤
- 3) 〔四〕輪〔の順の〕錯誤
- 4) 〔菩提心〕降下〔の順の〕錯誤
- 5) 〔四〕灌頂〔の順の〕錯誤
- 6) 垢〔の順の〕錯誤
- 7) 三界の食欲〔の〕錯誤
- 8) 〔四〕禪定〔の〕錯誤
- 9) 地と道〔の〕錯誤
- 10) *Caṇḍālī*の火〔の〕錯誤

11) 四印と四果における錯誤

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-2 〔第二の〕〈自宗の表詮〉(J.88a1)には二つ、

- 1) 宗義自体
- 2) それについての論難を反駁

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-2-1 第一の〈宗義自体〉(J.88a2)には三つ、

- 1) 正しい場所
- 2) 正しい本性
- 3) 正しい階梯(第四が俱生歓喜)

4-2-2-2-1-1-3-3-1-2-3-2-2 〔第二の〕〈論難を反駁〉(J.89b5)には二つ、

- 1) 離歓喜と離離の歓喜を混乱させない
- 2) 最勝歓喜と最勝離の歓喜を混乱させない

4-2-2-2-1-1-3-3-1-1 (and 2) 第二の〈〔自身加持と曼荼羅輪の方便の〕無所縁の勝義菩提心〉(J.90b6)には二つ、

- 1) 二所縁に依止して生じる智慧を救護する理趣(156b)
- 2) 自身加持の無所縁を特別に救護する理趣

4-2-2-2-1-1-3-3-2 第二の〈実修から生じる三摩地の定義〉(J.92b1)には二つ、

- 1) 勝義として離戲論であっても世俗として真言と尊格は正しく存在する
- 2) それ故に輪廻から出離する一切諸法は瑜伽の三摩地から生じる

4-2-2-2-1-1-3-3-3 第三の〈利得の発生〉(J.92b3)には二つ、

- 1) 方便が依拠する理趣(飲食・睡眠・覚醒など)
- 2) 数習によって河流の〔ような〕三摩地が出生

4-2-2-2-1-1-3-3-4 第四の〈危難の放逐〉(J.93a2)には二つ、

- 1) 危難の種類
- 2) 三摩地による放逐

4-2-2-2-1-1-3-3-5 第五の〈〔三摩地の〕熱の標識〉(J.93a4)には二つ、

- 1) 道の境界(畏怖・狂乱・苦などの分位)
- 2) 境界の標識(陽炎・煙・螢光・灯明・常光明など)

4-2-2-2-1-1-4 第四の〈二次第に住する者が熱を得てから自心の情器世間を現観するための行〉(J.93b2)には二つ、

- 1) 行の準備となる熱
- 2) 熱が得られた者が行じる行自体

4-2-2-2-1-1-4-1 第一の〈行の準備となる熱〉(J.93b4)には六つ、

- 1) 熱と言われるものの本性（三摩地から生じた身語意の威力）
- 2) 区分（熱の一般的標幟と熱の三区分）
- 3) 各区分の定義
- 4) 未得の熱を得させる方便
- 5) 得られた熱を堅固にする〔ための〕時間
- 6) 熱と行の境を結合（熱が小から中・大へと進むための行の種類）

4-2-2-2-1-1-4-1-3 〔第三の〕〈各区分の定義〉(J.93b6) には二つ、

- 1) 熱の一般的定義
- 2) 大・中〔・小〕三つの〔熱の〕定義（調伏、摂受の威力、世間八法の断など）

4-2-2-2-1-1-4-1-4 第四の〈未得の熱を得る方便〉(J.94b4) には三つ、

- 1) 大〔を得る〕方便（*haṭayoga* の実践）
- 2) 中〔を得る〕方便（*Avadhūti*〔の行〕を秘密裏に行う）
- 3) 小〔を得る〕方便（二次第修習）

4-2-2-2-1-1-4-2 第二の〈行自体〉(J.95a4) には六つ、

- 1) 行の本性
- 2) 〔行の〕区分
- 3) 各区分の定義
- 4) 行を行じる時
- 5) 所依の人士
- 6) 行の目的

4-2-2-2-1-1-4-2-2 第二の〈行の区分〉(J.96b2) には二つ（157a）、

- 1) *Avadhūti*（*kun 'dar*）〔の行〕
- 2) 普賢行（*kun tu bzang po'i spyod pa*）

4-2-2-2-1-1-4-2-4 〔第四の〕〈〔行じる〕時〉(J.97b3) には二つ、

- 1) いつ行じるか
- 2) どれほど行じるか

4-2-2-2-1-1-4-2-5 〔第五の〕〈人士〉(J.98a2) には二つ、

- 1) 熱が得られた者
- 2) 今生で仏〔地〕を願う者

4-2-2-2-1-1-4-2-6 〔第六の〕〈目的〉(J.98b1) には二つ、

- 1) *Avadhūti*〔の行〕の目的（自利）
- 2) 普賢〔行〕の目的（利他）

4-2-2-2-1-1-5 第五の〈行に住する者が最勝悉地の近因を修習〉(J.98b5)
には二つ、

- 1) 近因の必要性
- 2) 近因を実修する理趣

4-2-2-2-1-1-5-2 第二の〈近因を実修する理趣〉(J.99b1)には六つ、

- 1) 近因の本性
- 2) いつ現行するかの時
- 3) 現行する場所
- 4) 何に依止して成就するかの所依
- 5) 現行する方便
- 6) 方便に依止して現行から果が成就する理趣

4-2-2-2-1-1-5-2-1 第一の〈近因の本性〉(J.99b2)には二つ、

- 1) [Āli・Kāliを自性とする菩提心が] 八法 or 六法を自性とするもの
- 2) それについての論難を反駁

4-2-2-2-1-1-5-2-2 [第二の]〈[現行する]時〉(J.100b2)には二つ、

- 1) [近因を] 修習する時
- 2) [近因を] 成就する時

4-2-2-2-1-1-5-2-3 [第三の]〈[現行する]場所〉(J.101a1)には二つ、

- 1) 外の場所
- 2) 内の場所

4-2-2-2-1-1-5-2-3-1 第一の〈外の場所〉(J.101a1)には三つ、

- 1) 共の場所(金剛座)
- 2) 不共の場所(色究竟天)
- 3) 勝義[の場所](金剛乗の修法者にとっては住するいづこも金剛座)

4-2-2-2-1-1-5-2-5 第五の〈[現行する]方便〉(J.101b5)には二つ、

- 1) 自身加持
- 2) 曼荼羅輪

4-2-2-2-1-1-5-2-6 第六の〈果が成就する理趣〉(J.101b6)には二つ、

- 1) 共乗[から知られるもの](晨朝に四禅定に依止して解脱)
- 2) 不共[乗]から知られるもの

4-2-2-2-1-1-5-2-6-2 第二の〈不共[乗]から知られるもの〉(J.102a2)
には二つ、

- 1) 外の現證菩提(五種現等覚の理趣によって成仏)
- 2) 内の現證菩提

4-2-2-2-1-2 第二の〈世間と出世間の一切悉地成就の現観〉(J.102b2)には五つ、

- 1) 一切如来の御心を勧発せしめるための真言（157b）念誦（sngags kyi bzlas）
- 2) 危難を鎮めるためのバリ（gtor ma）
- 3) 悉地を速やかに成就させる方便である護摩（sbyin sreg）
- 4) 色身加持によっても成就するための善住式（rab gnas）
- 5) 劣った悉地を信解する有情摂受のための広大な羯磨集成（las kyi tshogs rab 'byam）

4-2-2-2-1-2-1 第一の〈真言念誦〉²² (J.102b5)には二つ、

- 1) 真言の本性（自心が全ての戯論を遠離）
- 2) 〔真言の〕区分

4-2-2-2-1-2-1-2 第二の〔真言の〕区分（J.102b6）には三つ、

- 1) 勝義の真言（本性と相応する自心）
- 2) 内と相似して説かれる真言（臍にある Am 字から一切の真言が出生）
- 3) 真言の概義

4-2-2-2-1-2-1-2-3 第三の〈真言の概義〉(J.103a3)には六つ、

- 1) 真言を清浄にするために撰集
- 2) 撰集された真言自体
- 3) 念誦に用いる念珠
- 4) 〔念誦の時の〕食物（乳を飲むこと等）
- 5) 念誦の口訣
- 6) 〔真言念誦の〕目的

4-2-2-2-1-2-1-2-3-1 第一の〈真言を清浄にするために撰集〉(J.103a4)には三つ、

- 1) 本体と支分の撰集
- 2) 偈頌によって撰集
- 3) 念誦して撰集

4-2-2-2-1-2-1-2-3-1-1 第一の〈本体と支分の撰集〉(J.103a5)には二つ、

- 1) 撰集の根基（Āli と Kāli）
- 2) 撰集の方便（Kāli から本体を撰集し、Āli から支分を撰集）

4-2-2-2-1-2-1-2-3-1-2 第二の〈撰集の方便〉(J.103a5)には三つ、

- 1) 輪に依止して撰集

- 2) 旋律を明白にして句に依止して撰集
- 3) 種子に依止して撰集

4-2-2-2-1-2-1-2-3-2 〔第二の〕〈真言自体〉(J.103a6) には四つ、

- 1) 念誦の真言
- 2) 羯磨集成の真言
- 3) 種子の真言
- 4) バリと食物などを加持する真言

4-2-2-2-1-2-1-2-3-3 〔第三の〕〈念珠〉(J.103b2) には七つ、

- 1) 〔念珠の〕素材(水晶・水牛の角など)
- 2) 珠の数(四種法ごとに異なる)
- 3) 念珠の紐
- 4) 親玉(念珠を二匝にして持ち、色身と法身を象徴せしめる等)
- 5) 〔念珠の〕繰り方
- 6) 〔念珠の〕加持(念珠を両の掌に入れて加持)
- 7) 〔念珠の〕数え方(四種法ごとに拇指と結ぶ指が異なる)

4-2-2-2-1-2-1-2-3-5 〔第五の〕〈念誦の〕口訣(J.103b3) には六つ、

- 1) 止滅の念誦('gog pa'i bzlas pa, 生氣風を繫縛して意で念誦)
- 2) 拡散・収斂〔の念誦〕
- 3) 金剛〔念誦〕(生氣風の往来と結合した念誦)
- 4) 低声念誦(舌先と唇が動くだけの念誦)
- 5) 〔文字(akṣara)の〕布置
- 6) 回転の念誦

4-2-2-2-1-2-1-2-3-5-6 第六の〈回転の念誦〉(J.103b4) には二つ、

- 1) 〔観想で女尊を伴う〕'do li の〔念誦〕
- 2) 〔伴わない〕ma ning の〔念誦〕

4-2-2-2-1-2-1-2-3-6 〔第六の〕〈目的〉(J.104a1) には二つ、

- 1) 一般的目的(一切如来の御心を勧発して通知申し上げること)
- 2) 殊勝な理由(所願成就のため自心に秘密真言を結びつける)

4-2-2-2-1-2-2 第二の〈バリ〉(J.104a4) には五つ(158a)、

- 1) 撒与の時
- 2) 資具
- 3) 儀軌
- 4) 目的(妨害者と災難から有情の命を救護)
- 5) 随機の理由(病氣平癒・享受増大)

4-2-2-2-1-2-2-1 第一の〈撒与の時〉(J.104a5)には二つ、

- 1) 通常の時（時の区切りと関わる）
- 2) 特別な時（月に六日 or 八日）

4-2-2-2-1-2-2-3 〔第三の〕〈儀軌〉(J.104a6)には四つ、

- 1) 神饌 (rdzas, dravya)
- 2) 賓客 (mgron)
- 3) バリなどの奉獻
- 4) 後始末の儀軌

4-2-2-2-1-2-2-3-1 第一の〈神饌〉(J.104a6)には四つ、

- 1) 洗淨
- 2) 浄化
- 3) 生起
- 4) 加持

4-2-2-2-1-2-2-3-2 〔第二の〕〈賓客〉(J.104b1)には四つ、

- 1) 生起
- 2) 鉤召
- 3) 加持
- 4) 灌頂

4-2-2-2-1-2-2-3-3 〔第三の〕〈奉獻など〉(J.104b1)には四つ、

- 1) バリ [の奉獻]
- 2) 供養 [の奉獻] (pūjā)
- 3) 讚嘆 (bstod pa)
- 4) 事業の依頼 (phrin las gzhol ba)

4-2-2-2-1-2-2-3-4 〔第四の〕〈後始末の儀軌〉(J.104b2)には四つ、

- 1) 金剛歌と吉慶讚で喜びの生起
- 2) 所願成就の懇願
- 3) 堪忍と還着の奏上
- 4) 誓願とバリ撒与

4-2-2-2-1-2-3 第三の〈護摩〉(J.105a2)には三つ、

- 1) 加行
- 2) 正行
- 3) 隨行

4-2-2-2-1-2-3-1 第一の〈加行〉(J.105a2)には六つ、

- 1) 火炉 (thab)

- 2) 柴木 (bud shing, 四種法ごとに異なる)
- 3) 火 (四種法ごとに異なる)
- 4) 供物と焼供投入物を配置法 (息災・増益・敬愛では献供品は右, 供物は左)
- 5) 時分 (四種法ごとに異なる)

6) 修法者の殊勝

4-2-2-2-1-2-3-1-1 第一の〈火炉〉(J.105a3)には五つ(四種法ごとに異なる),

- 1) 形 (dbyibs)
- 2) 寸法 (tshad)
- 3) 色 (kha dog)
- 4) 標幟 (mtshan ma)
- 5) 辺縁と周界 (mu ran, 炉壇)

4-2-2-2-1-2-3-1-6 〔第六の〕〈修法者の殊勝〉(J.105a4)には五つ(四種法ごとに異なる),

- 1) 〔修法者の〕対面方向
- 2) 坐姿勢 (蓮華座・吉祥座など)
- 3) 装飾品・法衣
- 4) 思念
- 5) 大杓・小杓

4-2-2-2-1-2-3-2 〔第二の〕〈正行〉(J.105a5)には六つ,

- 1) 〔修法者〕自身の瑜伽
- 2) 点火
- 3) 火炉と資具の洗淨
- 4) 火炉を現前に造作
- 5) 世間の火天供養
- 6) 出世間の火天供養

4-2-2-2-1-2-3-3 〔第三の〕〈随行の儀軌〉(J.105a6)には六つ,

- 1) 世間の (158b) 火天を残滓で供養
- 2) バリ撒与
- 3) 乳粥の齋 (tsa ru'i bza' ba) の享受
- 4) 所願成就の懇願・堪忍と還着の奏上
- 5) 誓願の懇願
- 6) 後始末

4-2-2-2-1-2-4 第四の〈善住式〉²³（J.105b2）には六つ、

- 1) 何を対象に善住式を為すか（尊像・仏殿・仏塔・經典・仏具など）
- 2) 善住式を為す阿闍梨（已灌頂者で秘密真言を究竟じた者）
- 3) 善住式を為す時
- 4) 〔善住式を〕為す場所（特に沐浴させる台座を置く）
- 5) 〔善住式を為すための〕資具（灌頂と護摩の場合の必需品と関連）
- 6) どのように為すかの儀軌

4-2-2-2-1-2-4-6 第六の〈どのように為すかの儀軌〉（J.106a4）には三つ、

- 1) 加行（善住式は曼荼羅と関係するので、曼荼羅作成を先行させてから加行に入る）
- 2) 正行（晨朝に修法する）
- 3) 随行

4-2-2-2-1-2-4-6-1 第一の〈加行〉（J.106a5）には七つ、

- 1) 沐浴
- 2) 浄化
- 3) 四支による生起
- 4) 供養
- 5) 〔諸仏・諸菩薩に〕善住式の挙行を通達
- 6) 智慧の〔尊格の〕来臨を懇願
- 7) 〔尊像の面を〕後ろ向きにするか〔布で〕覆う

4-2-2-2-1-2-4-6-2 〔第二の〕〈正行〉（J.106b2）には七つ（1~4は加行と共通、5~7は不共）、

- 1) 沐浴
- 2) 浄化
- 3) 〔四支を円満に〕生起
- 4) 供養
- 5) 開眼
- 6) 〔尊像にこれ以降は〕堅固に住し給えと懇願
- 7) 不共の力の奉獻

4-2-2-2-1-2-4-6-3 〔第三の〕〈随行儀軌〉（J.106b4）には七つ、

- 1) 所依を招請して〔集めた〕場合は揆遣
- 2) 護法尊に〔尊像守護を〕指示
- 3) 施主に〔尊像〕供養を指示
- 4) 広大な誓願の念誦

- 5) 過不足修復のための息災護摩
- 6) 資財納受
- 7) 祝宴

4-2-2-2-1-2-5 第五の〈広大な羯磨集成〉(J.107a2)には二つ、

- 1) 成就の方便
- 2) 成就した悉地自体

4-2-2-2-1-2-5-1 第一の〈成就の方便〉(J.107a3)には三つ、

- 1) 息災などの劣った成就の方便
- 2) 中の八大悉地成就の方便
- 3) 中の優れた成就の方便

4-2-2-2-1-2-5-1-1 第一の〈息災などの劣った成就の方便〉(J.107a3)には二つ、

- 1) 単独で(159a)成就
- 2) 〔数種の〕組(次の項目の二つ・三つ・四つ・全てを實踐)で成就

4-2-2-2-1-2-5-1-1-1 第一の〈単独で成就〉(J.107a4)には五つ、

- 1) 〔調合した〕靈藥(rdzas sbyor)に依止
- 2) 幻輪('phrul 'khor, 護符)に依止
- 3) 念誦に依止
- 4) 護摩に依止
- 5) 禪定に依止

4-2-2-2-1-2-5-1-2 〔第二の〕中の〔八大悉地〕成就(J.107b2)には二つ、

- 1) 一般的成就(屍鬼・夜叉女によって与えられる)
- 2) 各別の成就

4-2-2-2-1-2-5-2 第二の〔成就した〕悉地自体(J.108a5)には三つ、

- 1) 息災などの劣った〔悉地〕
- 2) 中〔の悉地〕
- 3) 中の大〔の悉地〕

4-2-2-2-1-2-5-2-1 第一の〈息災などの劣った悉地〉(J.108a5)には二つ、

- 1) 根本の羯磨(息災法・増益法・敬愛法・降伏法)
- 2) 支分〔の羯磨〕(思議できない数)

4-2-2-2-1-2-5-2-2 〔第二の〕中〔の悉地〕(J.109a1)には八つ、

- 1) 眼藥(mig sman)
- 2) 足に塗る藥(rkyang byug 神足)

- 3) 宝剣 (ral gri)
- 4) 地下 (sa 'og)
- 5) 隠身 (mi snang)
- 6) 靈薬 (bcud len, *rasāyana*, 得長寿法)
- 7) 大威力 (mthu chen)
- 8) 夜叉女を支配 (gnod sbyin mo dbang du bya ba)

4-2-2-2-1-2-5-2-3 [第三の]〈中の大〔の悉地〕〉(J.109b2) には三つ、

- 1) 虚空行 (mkha' spyod)
- 2) 持明者 (rig pa 'dzin pa)
- 3) 転輪王 ('khor los sgyur ba)

4-2-2-2-1-3 第三の〈〔大印最勝悉地成就と世間・出世間の一切悉地成就の〕両方に必要な三昧耶と律儀〉(J.110a2) には二つ、

- 1) 三昧耶の種類 (四灌頂, 身語心, 熱の大・中・小で区分など)
- 2) 三昧耶をどのように守護するかの理趣

4-2-2-2-1-3-2 第二の〈どのように守護するかの理趣〉(J.110a4) には三つ、

- 1) 初業者がどのように守護するか
- 2) 熱を少しく得た者が守護する理趣
- 3) 〔熱を〕大きく得た者が守護する理趣

4-2-2-2-1-3-2-1 第一の〈初業者がどのように守護するか〉(J.110a4) には二つ、

- 1) 獲得後に守護する理趣の説示
- 2) 違犯した後で修復する方便の説示

4-2-2-2-1-3-2-1-1 第一の〈獲得後に守護する理趣を説く〉(J.110a5) には二つ、

- 1) 守護の三昧耶
- 2) 飲食の三昧耶

4-2-2-2-1-3-2-1-1-1 第一の〈守護の三昧耶〉(J.110a5) には二つ、

- 1) 広大な守護
- 2) 要略した守護

4-2-2-2-1-3-2-1-1-1-1 第一の〈広大な守護〉(J.110a6) には三つ²⁴、

- 1) 根本〔十四〕墮罪
- 2) 支分の墮罪

3) 密意して説く三昧耶（違逆方便）

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2 第二の〈飲食の三昧耶〉(J.111a4)には二つ、

- 1) 通常の飲食の三昧耶
- 2) 殊勝な飲食の三昧耶 (tshogs kyi 'khor lo, *ganacakra*, 聚輪)

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-1 第一の〈通常の飲食の三昧耶〉(J.111a5)には三つ、

- 1) [甘露の] 丸薬成就
- 2) 依止 [する時] (每刻・毎日・毎月)
- 3) 利益 (金剛ダーキニーによる加持, 生命と身体のラサーヤナとなる)

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2 [第二の]〈殊勝な飲食の三昧耶〉(J.111b4)には二つ、

- 1) 語義 (159b)
- 2) 儀軌

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-1 第一の〈語義〉(J.111b5)には五つ²⁵、

- 1) 人士の区分 (聚輪・男性勇者の饗宴・女性勇者の饗宴)
- 2) 時の区分 (護摩・善住式の際には「乳粥の齋」)
- 3) 瑜伽の区分 (本尊瑜伽を異にする集会は「親しい者の集会」)
- 4) 目的による区分 (調伏の際には「仏の舞踏」)
- 5) 供養対象の区分 (Rigs ldan ma 供養, *Kumārī* 供養)

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2 第二の〈儀軌〉(J.112a2)には六つ、

- 1) 場所
- 2) 時
- 3) 資具 (肉と酒は必須の品)
- 4) 人士
- 5) 儀軌
- 6) 目的

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-1 [第一の]〈場所〉(J.112a3)には二つ、

- 1) 初業者の場所
- 2) 心堅固を得た者の場所

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-2 [第二の]〈時〉(J.112a5)には二つ、

- 1) 通常の時 (上弦の八日・十四日・十五日, 下弦も同様に一ヶ月に八か日)
- 2) 特別な時 (タントラ聴聞と講釈, 延命祈願, 飢饉を鎮める時など)

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-4 [第四の]〈人士〉(J.112b5)には三つ、

- 1) 初業者
- 2) 心堅固を得た者
- 3) 心の大堅固を得た者

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-5 〔第五の〕〈儀軌〉(J.113b1)には三つ、

- 1) 加行
- 2) 正行
- 3) 隨行

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-5-1 第一の〈加行〉(J.113b2)には六つ、

- 1) 住居の莊嚴
- 2) 内外供物の準備
- 3) 金剛阿闍梨へ〔入住の〕懇願
- 4) 〔集会者は〕身振りの符牒で応答して入住
- 5) 本尊瑜伽の懇願
- 6) 百字真言で心相続の淨化

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-5-2 〔第二の〕〈正行〉(J.113b3)には〔我生起での供養と我生起・前面生起の両方での供養があり、その両者ともが〕六つ、

- 1) 三摩地の曼荼羅が廣大供養で満足
- 2) 胸の智慧の尊格が甘露の享受で満足
- 3) 守護・護法神がバリで満足
- 4) 三昧耶を具えた勇者と瑜伽女が内護摩で満足
- 5) 内外のダーキニーが歌舞で満足
- 6) 身曼荼羅が俱生智で満足

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-5-3 〔第三の〕〈隨行〉(J.114a1)には六つ、

- 1) 加持のために金剛歌・吉慶讚の歌唱
- 2) 殘滓のバリによって〔生類を〕満足させる
- 3) 〔所作の〕過不足修復のための(160a)百字真言の念誦
- 4) 積集した業に果をもたせるために誓願の念誦
- 5) 現前生起の賓客へ還着の奏上
- 6) 守護して後始末

4-2-2-2-1-3-2-1-1-2-2-2-6 第六の〈目的〉(J.114a3)には二つ、

- 1) 根本目的（仏位の獲得）
- 2) 隨機の目的（長寿・無病など）

4-2-2-2-1-3-2-1-2 〔第二の〕〈違犯を修復〉(J.114a6)には二つ、

- 1) 軽微な墮罪からの回復
- 2) 重大違犯に対して三昧耶と律儀を正しく回復

4-2-2-2-2 第二の〈道が生じる階梯である人士の部類〉(J.115a1) には三つ、

- 1) 人士の部類の区分
- 2) 質問の提起
- 3) 返答

4-2-2-2-2-1 第一の〈人士の部類の区分〉(J.115a2) には三つ、

- 1) 灌頂による区分(阿闍梨灌頂の有無によって阿闍梨と弟子の区分)
- 2) 行による区分(外で励む者と内で励む者)
- 3) 果〔成就〕の遠近による区分(最勝の人士・中の人士・下の人士)

4-2-2-2-2-2 第二の〈質問〉(J.115a4) には三つ、

- 1) 十一現観の実修に一人の阿闍梨が必要か、あるいは弟子でも実修は可能か否か
- 2) 阿闍梨となった者も実修が必要か否か
- 3) 実修すれば今生で成就するか、臨終などで成就するのか

4-2-2-2-2-3 〔第三の〕〈返答〉(J.115a6) には三つ、

- 1) 全てを実修するには金剛阿闍梨が一人必要であり、弟子によってでは不可能
- 2) 阿闍梨は全てを実修できるが、内で励むことで道の五支分を断じる
- 3) 実修すれば上・中の人士は四時 or 三時に成就する

4-2-2-2-2-3-3 第三の〈上・中の人士は四時 or 三時に成就する〉(J.117a2) には二つ、

- 1) いつ成就するかの時
- 2) 成就する時の支分

4-2-2-2-2-3-3-2 第二の〈成就する時の支分〉(J.117a4) には四つ、

- 1) 今生で成就する支分であるラサーヤナ(靈薬)
- 2) 臨終に成就する'da' ka ma の支分
- 3) 中有で成就する中有の支分
- 4) 転生して(160b) 成就する誓願の支分(転輪王に転生して有情利益を為す)

4-3 第三の〈果〔タントラ〕の定義〉(J.119b1) には二つ、

- 1) 分位の果である十二地成就の理趣
- 2) 究竟の果である仏地成就の理趣

4-3-1 第一の〈分位の果である十二地成就の理趣〉(J.119b3)には二つ、

- 1) 一般に地獲得の〔分位の〕数を四つ（信解・行・證得・成就）に建立
- 2) 地の現觀を嚴密に釈説

4-3-1-2 第二の〈地の現觀を嚴密に釈説〉(J.120a2)には四つ、

- 1) 地成就の因は何か
- 2) 證得の殊勝
- 3) 成就の標識
- 4) 語義

4-3-1-2-1 第一の〈地成就の因は何か〉(J.120a3)には二つ、

- 1) 心相續の因（*Avadhūti* の行と普賢行、近因）
- 2) 正因（*dn̄gos kyi rgyu*）

4-3-1-2-1-2 第二の〈正因〉(J.120b2)には四つ、

- 1) 脈管
- 2) 脈管の文字
- 3) 界の甘露
- 4) 心臓にある智慧の生氣風〔が中央脈管の中に融化して諸地を順次に證得〕

4-3-1-2-3 〔第三の〕〈〔成就の〕標識〉(J.121a5)には二つ、

- 1) 初地の標識
- 2) 〔二地〕以上〔の諸地〕は〔徳性が〕増大

4-3-1-2-4 〔第四の〕〈語義〉(J.122a4)には二つ、

- 1) 不共の名称によって〔地を〕要約して説く
- 2) 不共自体を共の名称に結びつけて広大に釈説

4-3-1-2-4-1 第一の〈不共の名称によって要約〉(J.122a5)には二つ、

- 1) 外の地方（*pīṭa* 等の巡礼地）の区分
- 2) それを内の身に結びつけて釈説（内の *pīṭa* 等）

4-3-1-2-4-2 〔第二の〕〈不共自体を共の名称に結びつけて広大に釈説〉(J.122b5)には二つ、

- 1) 十二地それぞれの語義（*pīṭa* は歡喜地, *upapīṭa* は離苦地など）
- 2) 地の一般的語義

4-3-2 第二の〈究竟である仏地〉(J.124b2)には二つ、

- 1) 仏地を現行する方便である近因の稀有なる予兆

2) それが現行した果の定義

4-3-2-1 第一の〈仏地を現行する方便〔である近因の稀有なる予兆〕〉
(J.124b3) には二つ、

- 1) 近因の建立
- 2) 果成就の稀有なる標識の説示

4-3-2-2 〔第二の〕〈〔現行した〕果の定義〉(J.125b2) には二つ、

- 1) 他説と相応する〔仏〕身建立
- 2) 本所説（サキヤ派の宗義）で知られる果の定義

4-3-2-2-1 第一の〈他と相応する〔仏〕身建立〉(J.125b2) には二つ、

- 1) 波羅蜜乗から知られるもの
- 2) 金剛乗から知られるもの

4-3-2-2-1-1 第一の（161a）〈波羅蜜乗から知られるもの〉(J.125b3) には四つ、

- 1) 二身説（解脱身と色身）
- 2) 三身説（大乘莊嚴經論の自性身・受用円満身・變化身）
- 3) 四身説
- 4) 三身説の二つの流儀

4-3-2-2-1-1-3 〔第三の〕〈四身説〉(J.126a2) には二つ、

- 1) 現觀莊嚴論の密意（自性身・受用円満身・變化身・法身）
- 2) 撰大乘論の密意

4-3-2-2-1-2 〔第二の〕〈金剛乗から知られるもの〉(J.127b1) には三つ、

- 1) 七支具足説（①受用円満・②結合・③大樂・④無自性・⑤悲・⑥相續不斷・⑦不壊）
- 2) 三身七支具足説（法身に④、受用円満身に①②③、變化身に⑤⑥⑦を配当）
- 3) 二身十四支〔具足〕説

4-3-2-2-1-2-3 第三の〈二身十四支〔具足〕説〉(J.128a2) には二つ、

- 1) 勝義の〔三〕身（法身は④、受用円満身は①②③、變化身は⑤⑥⑦）
- 2) 標幟の〔三〕身（三身ともに上記と同じ名称の七支を具足）

4-3-2-2-2 〔第二²⁶の〕〈本所説で知られる果の定義〉(J.129a4) には三つ、

- 1) 所説である根基（bshad gzhi）の四身〔or 五身〕も五智に撰集
- 2) 能説（'chad byed）を五支分に撰集
- 3) 〔仏〕身と支分が融合

4-3-2-2-2-2 第二の〈能説を五支分に撰集〉(J.129b3)には五つ、

- 1) 転依（存在根拠の完全な転換）
- 2) 智身であること
- 3) 無住处涅槃
- 4) 不二（*advaya*）
- 5) 御事業の相続不断

4-3-2-2-2-2-1 第一の〈転依〉(J.129b4)には四つ、

- 1) 五蘊転依の理趣
- 2) 所依である四曼荼羅に能依である意で五つに撰集（四曼荼羅を意趣すれば五身・五智に転依）
- 3) 身語意の三つに撰集（身語意を意趣すれば身金剛が法身 or 変化身，語金剛が受用身，意金剛が変化身 or 法身）
- 4) 一切の作者は意であるから、意のみが転依する理趣

4-3-2-2-2-2-1-1 第一の〈五蘊転依の理趣〉(J.130a3)には二つ、

- 1) 金剛乗の密意（五蘊は五部族や五智に転変）
- 2) 撰大乘論の密意

4-3-2-2-2-2-2 第二の〈智身であること〉(J.131b2)には四つ、

- 1) 無身でない
- 2) 〔仏身は〕物質でない（五智を自性とする身）
- 3) 五智の身の定義（法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智）
- 4) 三身によって五智を撰集する理趣²⁷

4-3-2-2-2-2-3 第三の〈無住处涅槃〉(J.134a5)には三つ、

- 1) 輪廻でない
- 2) 涅槃でない
- 3) 即ち双運である

4-3-2-2-2-2-4 第四の〈不二〉(J.135a4)には二つ、

- 1) 要略（161b）
- 2) 広釈

4-3-2-2-2-2-5 第五の〈御事業〉(J.135b4)には三つ、

- 1) 法身は御事業の因
- 2) 受用身の御事業の理趣（十地の菩薩を利益）
- 3) 変化身〔の御事業〕を三部類に区分（利益の対象は最勝が地上の菩薩・中が劣った所化・下がいかなるものにも変化して有情利益を為す）

以上の現観の撰義として示したものは、因タントラについては四法、行の次第は十法、見の次第は四つ、不共の次第は四つ、優れたものについては七法、道の正行は十一法、随機の果より十二、究竟の果の支分は五つであって、合計すれば、現観は五十七法により示されるのであって、ここで仏がお説きになった一切諸法が理解できるのである。タントラ現観の撰義を終わる。

4 考察

筆者の研究目標は、現代のインド亜大陸にはもはや存在しないインド仏教金剛乗の全体図を明確にすることにある。この目標にとってサキャ派を始めとするチベット仏教各派の宗義解明は極めて重要な意味をもつ。今回その観点から取り上げた文献が『サパンの科文』である。同書の元となる『タントラ概論建立』および『宝樹』は大部な著作であり、その全体的把握は筆者の能力を超えている。本稿はこれまでの限られた分野である「小道」から上述の目標に直結する「大道」へ出る踏み台と考え、これまでの営為の現時点での小結を出しておきたい。

金剛乗の全体図を想定した場合、筆者はインド仏教の三乗の各が具える戒・定・慧の「三学」が基本的な構成概念として役立つと考えた。そこで金剛乗の場合は、その不共の見が「慧」に、生起・究竟の二次第修習が「定」に、生活規範である律儀と三昧耶が「戒」に相当するとの見解を発表してきた。金剛乗が展開した「行の体系」（戯論・無戯論・極無戯論）は「戒」の範疇に含まれる。

ガナチャクラ（聚輪）儀礼はインド仏教金剛乗の宗教実践を貫く赤い糸の内的一本としてある。各「行」の性格規定からすると、聚輪儀礼は護摩・バリ・善住式などの諸儀礼とともに戯論の行を構成することになる。同時に護摩・バリ等の諸儀礼を包摂する聚輪はそれら諸儀礼の上位に位置する。また、聚輪は金剛乗の根幹に置かれている灌頂儀礼とは特別な補完的關係をもつことが分かった。儀礼としては、灌頂自体は無戯論の行の範疇に属する。護摩・善住式などは、「真言理趣」であっても厳密には金剛乗とは言えない「初期密教」の時代からの長い歴史をもつ儀礼である。それらは金剛乗の論師たちが最勝なる大印成就にとっての障礙になるとして時には禁止した修法でもある。一方で金剛乗に独自の聚輪は、後に儀礼的祝宴にまで変貌するとしても、本来的には「天上で

の神々の集会」の地上における似姿である。同じ戯論の行とは言っても、この両者を同一地平では論じられないとの理解が筆者にはある。『サパンの科文』（『宝樹』）では、念誦・護摩・バリ・善住式・羯磨成就などの諸儀礼は、〈世間と出世間の一切悉地成就の現観〉と定義されている。聚輪儀礼は、別なカテゴリーである〔大印最勝悉地成就と世間・出世間の一切悉地成就の〕両方に必要な三昧耶と律儀に配当され、その中で〈飲食の三昧耶〉として〈守護の三昧耶〉と並んで分類されている。このように、両者は性格を異にするものとして理解されていることが分かる。他方で、灌頂儀礼は〈異塾させる灌頂の道〉として、秘密真言への入門であり、金剛乗の見が證得される前提条件とされている。

以上が筆者のこれまでの研究成果に引きつけた、謂わば「葦の髓」から眺めた『宝樹』の構成である。同書はサキヤ派がインド仏教金剛乗をどのように宗義として確立したかを見るための最重要なテキストの一つである。さらに戒・定・慧の三学が緋い交ぜられた全体としてのインド仏教金剛乗の構成原理を追求したい者にとっては、重要な「参考書」と言える文献であり、その意味からも『サパンの科文』は注目に値するものである。

あとがき

ツォンカパ（1357~1419）には、『菩提道次第』『真言道次第』の大著がある。その研究からこれまでに多くの成果が産み出されている。それと比べて、ほぼ二世紀の時を遡ったサキヤ派の祖師たちによるインド仏教金剛乗の概論を対象とした研究は遅れていると言わねばならない。本稿がその小さな一歩となれば幸いである。順番が後先になったが、次はソナム・ツェモ作『タントラ部概論建立』を元にした『サパンの科文』第一～三章の和訳を試みた後に、全体の考察に取りかかりたい。

一次資料

サキヤ派全集: *Sa skya pa' bka' 'bum, the Complete Works of the Great Masters The Sa sKya Sect of the Tibetan Buddhism,*
Bibliotheca Tibetica comp. by bSod nams rgya mtsho, Toyo Bunko, 1968（東洋文庫本, SKKB と略）

二次資料

静 春樹『ガナチャクラの研究: インド後期密教が開いた地平』山喜房

佛書林, 2007.

田中公明『チベット密教』春秋社, 1993.

Davidson, R. M., Preliminary Studies on Hevajra's Abhisamaya and the Lam 'bras Tshogs bshad, *Tibetan Buddhism Reason and Revelation*, State University of New York Press, 1992.

Jackson, P. David, *The Entrance Gate for the Wise*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, 1987.

¹ タクパギェンツェンによるサチェンの伝記は SKKB vol.3 No.5 *Bla ma sa skya chen po'i rnam thar*, Cha.167a6-175.

² [Davidson: 348] はその状況を次のように記す。

12c 最後の四半世紀と 13c 最初の四半世紀に蔵 (Tsang) 地方はインド人比丘たちで溢れかえっていたのである。これはシャーキャシュリー、Vibhūticandra, Sumatikīrti たちがチベットの西方や南方を巡錫し、Grags pa rgyal mtshan がサキヤの地で彼らの多くを世話する機会をもった時のことである。彼はインド人比丘たちの逗留を自らの学習に役立て、密教典籍に関しては、チベットへ難を逃れたインド人比丘たちから人生の後半に伝授を受けたのである。

³ サチェンは幾人もの子供をなしたことから「在俗密教行者」の範疇に属することは明らかである。しかし、その息子たちの内で宗権を担ったソナム・ツェモ、タクパギェンツェンの二人は生涯を梵行者で通したと伝えられている。サキヤ派の「在俗行者集団」から「出家者集団」への変貌は、これまで主に、シャーキャシュリーバドラとの邂逅によるサパンの受戒が出发点とされてきた。サパンの蔵・衛への遊学はすべて伯父タクパギェンツェンの指示によるものである。ソナム・ツェモのサンプ・ネウトク寺院での長期に亘る修学も考慮すると、時勢を見るに巧みなこの氏族宗教の路線変更はサチェン生存の時代からの規定方針であったとも考えられよう。比丘ではなかったとしても、「梵行優婆塞」であったソナム・ツェモとタクパギェンツェンをインド仏教金剛乗の在俗瑜伽行者 (siddha) の相貌を色濃く残した人物として描く先行研究には疑問がある。

⁴ [立川: 62] [田中 1993: 40]

⁵ [Davidson 2005:183~189] はサキヤ派の道果説が基づくとされる『金剛句偈』の成立にドクミの師匠 Gayadhara が深く関係していたと推理している。これは誰もこれまで取り上げなかった問題提起である。

⁶ SKKB vol.6, No.33, Pa.81a3-139a6.

⁷ Toh 419 Ḍākinīvajrapañjara-tantra

⁸ Toh 381 Sampuṭa-tantra

⁹ ソナム・ツェモの大著『タントラ部概論建立』を指す。

¹⁰ SKKB vol.3 Cha.2b4-3a4.

-
- ¹¹ SKKB vol.3 Cha.139a1-6.
¹² SKKB vol.3 Cha.1162a3-5.
¹³ [Jackson: 24, 30, 68~69]
¹⁴ ペルツェク研究所編纂の『サキヤ派全集（活字本）』は、18世紀にデルゲ印経院が出版した全集を底本として、Zha-lu 本と Lu-phu 本の2写本を校合している。
¹⁵ 『宝樹』では skal ba med pa.
¹⁶ テキストに出る brgyad pa (150a4) は bcu pa に訂正 (J.28a2)
¹⁷ 『宝樹』では項目 5)「胎生の広大釈説」を欠く。
¹⁸ 『宝樹』では「第四の〈四生成就の理趣〉」と出る。
¹⁹ 『サパンの科文』『宝樹』共に「第二」とあるが「第四」の誤り。
²⁰ テキストに出る gsum pa (154b1) は lnga pa に訂正 (J.72b2)
²¹ テキストに出る gnyis pa (155a2) は gsum pa に訂正
²² パクパ作 *rGyud kyi mngon par rtogs pa ljon chung*, SKKB vol.6, No.33, Pa.97a3-99a1 を参照。
²³ タクパギエンツェン作 *Arga'i cho ga dang rab tu gnas pa don gsal ba*, SKKB vol.4, No.108, Ta.86b5-107b4 を参照。
²⁴ 『宝樹』(J.110a6) では第三項目〈密意として説く三昧耶〉を別立していない。
²⁵ 『宝樹』では 2) と 3) の順番が逆である (J.111b6-112a1)。
²⁶ 『宝樹』に出る「第三」は「第二」の誤り。
²⁷ 『宝樹』では ye shes lngas sku gsum ji ltar bsdu pa (J.133b5-6)

キーワード

サキヤパンディタ ソナム・ツェモ タクパギエンツェン 金剛乗
『宝樹』 サキヤ派